

江戸川柳

― 齒は口ほどにものをいい ―

大庭
健

目次

はじめに

舌と齒を取り替てやる兩替屋

齒がわるくなると石臼眼の療治

口よりも齒を參らせる高野山

唇はさんごじゆ齒にはるりの露

孟宗が御袋は齒が丈ぶ也

乳母が宿齒をむき出して一分取り

齒のはへた袴で守る番手桶

小牧山齒をむき出して御立腹

せんだんの二齒にめして御ほうらつ

座敷牢友達共の齒が寒し

物くひがよくて下齒がすはりかね

賣上は稲こきの齒にくわへさせ

くきづけをくいに半日齒をいじり

獺の齒を寒くさせたる富士の夢

折ふしは小粒もあたる遣手の齒

齒がぬけたそうでをかしい牛房賣

親の恩齒がぬけてからかみしめる

齒はないが嫁をばひどくかみつける

耳に齒もなくて何かを聞きかちり

豆を喰ふ齒も無く成つて鳩の杖

齒のぬけたためかけ當主の脚をなめ

齒のぬけたそろばんのある村しちや

能いむすめ惜しい事には齒が黒し

向ふのかねで齒をそめるいゝ娘
お齒黒はしくくかぶる内につけ
湯殿さん齒黒へ御手が付き初め
雲の上車の齒迄黒くそめ
くろい齒へあてる小粒はほまちなり
はげた齒で女房八つ迄はなして
はげた齒を子に引かされて染直し
七所ほどて白齒は見染られ
讀みと歌公家衆白齒の嫁を取り
しら齒の殿御さとあやめうらやまれ
眞白な齒でぷつり切る三の糸
猪の早太齒をむき出しておどされる
花よめは齒にきぬきせて笑ふ也
焼飯に天草勢の齒は立ず
いゝ娘はだか承知で齒がたゝず
三つぶとんやはらかにして齒はたゝず
めがたきと思へど島田齒がたゝず
お妾へ齒がたつものは櫛ばかり
おもだか一と葉神農も齒が立ず
魚篇に堅くて初ては齒がたゝず
和らかな國でも犬の齒はたゝず
齒ぎしりのやうに枕のしまる音
くどかれて前齒できせるかんで居る
論に齒が立たず經文喰いやぶり
やはらかな嫁菜姑の御齒に合ひ
垢なめの齒にはさまつた灸のふた
齒にあたる肴を貰う三會目
根ごとぬく紅葉車の齒止めにし
齒をかんで十月待つてゐる國家老
齒ぎしりに神馬喰料かはかされ
齒がなけりやほつてもくへぬ孝行さ
くらへども其あじわひは入齒也

呑こんだ入齒おかはでいせや取り
角力好き入齒の工合くひ違ひ
目にはめがねはは入ばにて間にあへど
路次口の笑ひ齒入が出て居る
喰つぶすやつに限つて齒をみがき
雪隠で齒をみがいて居候
九重は齒みがきよりもふしがうれ
楊枝見せ人の口はにかゝる也
浅草で高い楊枝を武士つかひ
柳と娘こきまぜる楊枝見せ
楊枝やは戸板に豆を出して置き
はやり醫者やうじをもつてかごにのり
ぎんなんが落ちると楊枝置いて立ち
齡ほど枝をついてる一松
おわりに

はじめに

歯は体の中で最も固い器官。色合いは身体の中の部位の組織よりも白い。歯は一生に二度も生えるのは、他の臓器や器官にはない現象。歯が奇異な目で見られても不思議ではない。

歯の本来の役割は食物を噛むことにある。言葉をこしらえる時もなくしてはならない体の一部である。歯と舌と唇の共同作業がなければ明瞭な言葉は生まれない。歯自体はものを言う訳ではないが、無言であつても身体言語として感情表現は出来る。

歯は齡よわいを意味する。齡が進めば歯は欠落し、その先には死が待っている。⁴ 歯の抜けた夢ゆめは不吉ふきつ”と言うことわざがあるのはそのためであろう。

歯が抜けると死を暗示する。「歯が抜けたよう」と言えば、人や物が欠けた寂しさを表す。歯の命も人の命と同じである。一度失った命は蘇らない。

歯は齡の同義語であるだけではない。喜・怒・哀・樂の感情表現の身体言語としても歯は用いられる。特に「歯切り」「歯ぎしり」「歯を食いしばる」などと言った表現が江戸文学の『黄表紙』『洒落本』『人情本』などに多く見られるのは注目に値する。

江戸期の庶民生活に根ざした川柳に歯がたびたび詠まれるのは、江戸文学にある感情表現と無関係ではあるまい。江戸庶民は生活のもどかしさを、言葉の力を借りて川柳で思いを吐いたに違いない。

江戸川柳で既婚婦人の象徴であるお歯黒が多く詠まれているのは特筆に値する。お歯黒はその風俗や風習において、ある時は妖艶に、またある時は怪しげに映る。お歯黒が川柳の好材料になるのは不思議なことではあるまい。

川柳は徳川幕府の重庄に対する江戸庶民のおどけであつたとも取れる。川柳の命とも言ふべき穿ちや洒落で人のこころや世の中の機微を透かして見たのは見事である。中でも武士、僧侶、医者、学者など、当時の特権階級の人間が穿ちの標的になっているのは見逃せない。庶民とは異なる次元の世界に生きた者には一種独特な論理や慣習があり、それらが普通の人間には何とも滑稽に見えたのである。

川柳は俳諧の前句付の付句が独立したものである。「川柳」という呼び名は点者、柄井川柳りゅう（二七二八―一七九〇）の名に由来し、初代川柳の時代までは、この文芸を「前句付」と言った。明和二年（一七六五）になり、呉陵軒可有こりようけんあるべしが初代川柳の創刊した『萬句合』の中から、前句がなくても付句だけで意味の分かる句を選んで出版したのが『誹風柳多留』の初篇。以後『誹風柳多留』は、天保九年（一八三八）まで一六七篇が世に出ている。

川柳が五・七・五の十七文字から成るのは俳句と同じである。川柳は俳句のように、季語や切れ字などの堅苦しい約束がないのも特徴と言ってよい。文語体に拘ることなく、口

語調であるのも庶民に親しみを感じさせた。

俳句はおもに自然を相手にして詠むが、川柳は人間社会を風刺的に捕える。川柳には固有の癖があり、中でも穿ちの目は川柳の命と言ってよからう。

「穿ち」は穴をあけるという意味が、隠れた真実をえぐり出すという言葉に進化したものと解される。江戸川柳では事実の裏側をいろいろ詮索し、皮肉ったり、風刺するのが真髄である。穿ちの矛先の多くは事実の暴露や風刺に向けられるが、時には人の気付かないことや、うっかりして見過ごしそうな些細なことまで指摘して悦に入るのが身上。穿ちと言っても根底にはおかしみがあり、つい鼻で笑ってしまう。

役人の子はにぎくを能く覚え

『誹風柳多留』初篇

右は役人の賄賂を暴露した句。

役人の子は親の背中を見て育つので、お握りが上手になると皮肉った。
僧侶の内情を暴露した句の一つ。

緋の衣着れば浮世がをしくなり

『誹風柳多留』初篇

高僧になるとかえって浮世が恋しくなるものだと皮肉っている。
右の二つの句は穿ちの佳吟と言ってよからう。

初期の江戸川柳には穿ちの佳句が多くあったが、次第に世相や人のこころを突く題材が少なくなり、言葉遊びの句へと流れが変わる。

言葉遊びには、「文句取り」「語呂合わせ」「縁語」「掛詞」「字謎」などがあるが、これらは頭の体操とも言えるべき遊戯であり、感情を伴うものではない。

品川の客ににんべんのあるとなし

『誹風柳多留』七篇

品川の遊客は侍と寺の僧侶が多いと揶揄している。「寺」に人偏が付けば「侍」になる。風刺はあるが、微塵の可笑しみも感じられない。何か感じるものがあるとすれば、それは言葉遊びによる冷えた笑いであろう。

齒は物を噛む時だけ力を發揮するのではない。人間観察のための身体言語としても江戸

川柳では重宝にされる。短詩形滑稽文学と言われる川柳で、歯が風刺や嘲笑の対象になるのは決して偶然ではあるまい。必然的と言つてよい。歯は言葉に代わる身体言語としての表現力を秘めているからである。

江戸川柳に歯と言う小さな器官が詠まれているのは、江戸庶民がいかに歯に関心を示していたかを物語っていると云つても過言ではあるまい。遠い昔、歯が庶民の目にどのよう映ったかを知るには、底本にした『誹風柳樽全集』（國書刊行會）をひもとくのも一つの方策であろう。

舌と歯を取り替てやる兩替屋

『誹風柳多留』五十三篇

兩替屋の高慢な商いぶりを皮肉っている。

小判の形は楕円形で、二朱金は長方形。舌は小判、歯は二朱金の形に似ていることから、それぞれ貨幣の隠語として用いられた。特に「舌」は一両小判の通語として幫間ほうかんが使った。「幫間」は宴席に出て、遊客の機嫌を取り、遊興の場を盛り上げる男。いわゆる太鼓持ちや男芸者を言う。ちなみに、当時の金、銀、銅銭の三貨の換算では、一両小判は二朱金八枚と等価であった。

兩替屋は切賃きりちんと言われる手数料を取り、金銀と銭とを替える仕事を業とする家。金銀を銭に交換する場合、銭の使用に便利のように、一文銭九十六枚を麻縄に通して一括りにしたものをを百文と見做した。不足の四文は手数料として前もって差し引いたのである。一両が米一石に相当した当時、うどんや二八蕎麦の代金は十六文だったと言うから、四文の手数料はそれ程高くなかったと想像される。下品な話だが、夜鷹の相場は一回が二十四文だった。

「九尺間の棚借たなかりで銭見せぜにを出し、所見物の札銭ふだぜにを賣けるに、銀式匁・三匁のうちにて、五厘りん・壹分ぶんの掛込かけこみを見て、少しの事ながら、つもれば大分の利を取とり、次第に兩替屋となりて、是楠これくすのき分限ぶんげん、根のゆるぐ事なし」(『日本永代蔵』―四)。

右の一節にある「銭見せ」は錢兩替店のことであり、のちに江戸では兩替屋と呼ばれる。錢兩替店では手数料を取る商いしか出来なかったが、兩替制度が発達すると、兩替屋は金融機関として重要な役割を果たすようになる。

兩替屋は本来の業務に加えて、金銭の貸付や手形の割引なども行い高利益を得た。比喻とは言え、舌と歯を取り替える高慢な態度の兩替屋が皮肉られても仕方ない。

兩替屋の繁盛ぶりを穿った句をもう一つ。

兩替屋婆々車は持たぬ也

「婆々車」は齒の抜けた所のある大八車。車輪の輻^やを齒に見立て、車輪が壊れた車を齒の抜けた婆に譬えているのが面白い。齒の抜けた古い車では重い錢は引けないだろうと皮肉った。

齒がわるくなると石臼眼の療治

『誹風柳多留』三十六篇

齒を取り、齒も欠け、物が噛めなくなると、次は視力が衰えると悔んでいる。

「石臼」は石でこしらえた碾き臼。「療治」は「治療」に同じ。

理屈っぽい句であるが、身体の老化を石臼の老朽化になぞらえているのが面白い。石臼の齒とも言うべき目が磨り減り、役に立たなくなることと、人間の齒が悪くなると目も衰えて来ることを重ねて言って洒落ている。

「石臼眼」は大きい物はよく見えるが、小さい物は見えにくいと言うことの譬え。石臼の目は粗いので、石臼で挽いた粉はきめが粗いのに習っている。石臼の目が減るとさらにきめの粗い粉になるので、臼の目の手入れをしなければならない。

人の目の病は医者が手当てするが、磨り減った臼の目は石屋が手を入れる。臼の目の手入れはノミで溝を深くする。これを「臼の目を切る」と言う。臼の目を切り、目が鋭くなれば挽いた粉のきめは小さくなる。大きい物しか見えない人間の目も、治療すれば小さな物でも見えるようになるのに似ている。

「見よや、人の老いゆけば、目は遠山^{とほやま}の霞^めたな引き、耳には鳥虫^{もよほ}の声もうとく、口は冬がれの齒も落ちて、盛衰まのあたりかなしみを催^{うずめ}う」(『鶉衣^{うすしろも}』鼻箴^{はなのしん})は、俳文にある一節。

身体の衰えを自然界の事象になぞらえて優雅に描写しているが、心中の寂しさは察するに余りある。

体の衰えの中でも、感覚器の鈍麻は外界とのつながりを希薄にする。せめて食を楽しむたいと思っても、「口は冬枯れの齒も落ちて」では、顎は動いても物を噛み砕くことが出来ない。冬空の葉のない枯れ木にも増して、齒のない口元はもっと寂しい様相を呈する。人の齒と木の葉を掛けて言った工夫はあるが、洒落にもならない。

人間の体は歳とともに各所に衰えが現れる。数ある器官の中でも、昔から齒、目、何とかの順に弱ると言われている。特に男にとって性の減退は自尊心の喪失につながりかねない。

ここで、極め付きの嘆きの句を一つ。

つらいこと眼も齒もよくて今一つ

男の悩みを吐いている。齒と目はいいが、あと一つ肝心なところに元氣が出ない。悔んでもくやみきれない。

口よりも齒を参らせる高野山

『俳風柳多留』四十二篇

高野山は紀州の霊場。標高九〇〇メートルの山頂には弘法大師（空海）が開いた真言宗の総本山、金剛峯寺がある。

高野山（金剛峯寺の山号）が弘法大師により開山されたのは弘仁七年（八一六）のことである。それまでは高野山は人跡未踏の險阻な山だった。開山後の高野山であっても、金剛峯寺に詣でるには並々ならぬ困難があったと想像される。曲がりくねった参道を皆で励まし合い高野山の山門を目指したのであろう。途中、疲労困憊しても齒を食いしぼり、険しい道程を経て参拝するしかなかった。杖代わりに唱える念仏も言葉にならない。

先の句は高野山詣での苦労を詠んでいることに変わりはない。口で念仏を唱えながら高野山に「参る」と、齒を食いしぼるので齒が「参る」を掛けて言った洒落はあるが、それだけでは読みが浅い。もっと深い意味が隠されているのではないか。

「口」は口から出る言葉の比喻であり、「口から高野」（『滑稽本』浮世床）と言う俗信の利かせがある。口から高野は、俗世で愚かなことを口走ったため、高野山に登って出家しなければならなくなるの意。

「齒」はヒトの齒であるが、ここでは「牙」に読み替えるとよい。牙には「牙行」の語意がある。牙行は「牙錢」を取る行為であり、今風に言えば「手数料」を得ることであろう。賽錢も持たずに出家する者よりも、牙錢を得て高野山詣でする者の方が値打ちがある。だから口よりも齒を参らせるのだと穿ってみてはどうか。

高野山と齒の縁を詠んだ句をもう一つ。

高野山むかし隠した齒を納め

「コリヤわしどもの村の所法則ところほうそくで、その骨を高野へおさめに、きていきよるのでござるわいの」（『滑稽本』東海道中膝栗毛―八）。

右の一節にある「骨を高野へ」は、昔、京都丹波地方にあった言葉。丹波では親の認めない嫁が死んだ時、夫は嫁の遺骨を高野山に納める風習があった。

先の句では、「骨」を「齒」に置き換えているが、妻の亡骸を高野山に納めることに相違

はない。歯を「口の端^{くち}」と解すると、口の端には「人の噂」の意があり、妻の歯を納めればこころない人間の噂にのぼることはなくなると喜んだのかもしれない。

唇はさんごじゆ歯にはるりの露

『俳風柳多留』五十九篇

「朱唇皓齒」(『楚辞^{そじ}』大招^{だいしやう})を下敷きにした句である。

美人の相を詠んでおり、唇は珊瑚樹^{さんごじゆ}のように赤く、歯は瑠璃^{るり}のように青白く光り輝くと褒めたたえた。

「珊瑚樹」はスイカズラ科の常緑高木で、夏になると枝先に白い小花を多数、円錐状に付ける。秋には果実を結び、成熟すると楕円形の赤い液果になる。赤い色合いが暖海に棲む樹枝状のサンゴに似ていることから、「ギサンゴ」の別名を持つ。

「瑠璃」は青色をした光沢のある宝石。仏教で言う「七宝^{しつぽう}」の一つである。

「露」の解釈にはひと工夫が必要である。草木の葉などの表面に凝集する水滴としたのは平凡。もうひとひねりして、江戸期に通用した露の異称のある豆粒形の銀貨、「豆板銀」と解してはどうか。豆板銀の大きさは大小不揃いだが、形が小粒な歯に似ているのが特徴。豆板銀の重さも一定ではなく、秤量で銭の額を決めたと言うから、何ともおおらかである。歯の輝きの譬えが露の水滴であっても、豆板銀であったとしても、ともに白く光り輝くことに違いはない。

「殊^{こと}に口元かはゆらしく、只^{ただ}二三枚見ゆる白歯^{しらば}さへ、丁字車^{てうじぐるま}のはみがきにてみがき上げ、唇^{くちびる}は紅の色より赤く、近まさりしてうるはしく」(『人情本』春告鳥―初)。

右の一節にあるように、昔から白い歯と赤い唇は健康美の象徴であった。「白歯」は未婚女性の異称であるが、ここでは歯を白く磨き上げた娘を言う。

「丁字車のはみがき」は、江戸時代後期の戯作者、為永春水が調整して売り出した歯磨き粉の銘柄。春水自身が自家製品を自分の作品の中で宣伝するとは誠に失笑ものである。

春水と同世代の式亭三馬も自作の『浮世床』で、「三馬製法の箱入はみがきをもち、舌かきの付^つたるかんぼくのやうじでみがきながら来る」と書いている。商魂においては三馬も春水も同じ穴の貉である。

当時の戯作者は副業を持つのはもとより、自家製品の宣伝に至るまで、誰に憚ることなく自作自演出来たのであろう。

「赤く笑める口^あもとは、初めて開く芙蓉^{ふよう}の花、みがける歯は白くして、さながら雪のごと

くなり」(『仮名草子』浮世物語―二)とあるように、白い歯と赤い唇は昔から切ってもきれない関係にあった。中でも白い歯は、「きれいな物の品々」(『仮名草子』尤之双紙)の一つとして「若衆の歯の白さ」が挙げられているように、価値ある美意識だったのである。「むさき物之しなく」に「若衆の歯がすみ」があるのは当然のことであろう。

粹な若衆に限らず、美人の真つ赤な唇からこぼれる歯が歯垢で汚れていたのでは艶消しである。歯はやはり白く光り輝くものでなくてはならない。

孟宗が御袋は齒が丈ぶ也

『俳風柳多留』二十七篇

「孟宗」は中国の二十四孝の一人。

昔の中国には孝子と呼ばれる親孝行な息子が二十四人あったと伝えられている。

ある年の冬、孟宗の母がたけのこ筍を食べたいと言い出した。孟宗は裏の竹林に行き筍を探す、雪が深くて見つけることが出来なかった。

初夏が最盛期の筍を寒い冬に手に入れることなど出来る訳がない。

孟宗は竹に寄り添い、母の願いをかなえるため天に向かって祈った。するとその時、突然、大地が割れ、そこから筍が生えて来たと言う。

「孟宗は、雪のうちにたけのこ筍を多」(『曾我物語』―七)とあるように、孟宗の願いは通じて母親に筍を食べさせることが出来た。

「孟宗竹」と言う名も孝子、孟宗の徳にちなんで付けられた。

先の句は孟宗の美談を詠んだものではない。年寄のくせに歯が丈夫で筍を食いたがると皮肉ったのである。

孝子、孟宗を詠んだ句をもう一つ。

鋏に迄齒こたへのした孝の徳

裏山に積もった雪をかきわけ、鋏で筍を掘っていたところ、鋏の刃に地中の筍がゴツンと当たった。孟宗は歯応えのある筍を母親だけに食べさせたのではない。歯応えならぬ刃応えで、鋏にまで筍を食べさせた、と解したのでは平凡。もっと掘り下げ、孟宗の徳は母親にだけでなく、筍を掘る鋏にまで伝わったと読み取るべきであろう。

孟宗竹は中国南部の原産。わが国には琉球を経て元文元年(一七三六)に薩摩に入った。時が移り寛政の頃、孟宗竹は江戸薩摩藩により品川西南の丘陵地帯に植え広げられたとされている。

筍は江戸っ子の好物の一つ。特に初物を食べると命が七十五日延びると言う俗信があった。年寄が旬の筍を食べたがる訳はそこにあつたのかもしれない。

乳母が宿齒をむき出して一分取り

『誹風柳多留』三篇

乳母は幼児の母親代わりに乳を飲ませ、その他いろいろな世話をする女性。当然、既婚者であるが、住み込みで働く。里には子もあれば夫も居る。

古くから貴族社会では、育児は乳母にまかせる風習があつた。一般社会でも裕福な家庭では乳母を雇つた。乳母は、「乳母の家よりも秋山に行け」と言うことわざがあるくらい、貧しい家の出の者が多い。秋の山に行けば食べる物はいくらでもあるが、乳母の家には何も無いと言う譬え。

先の句の「宿」には人が居住する「宿」と、妻が自分の夫を卑下し、あるいは親しみを込めて言う時の「うちの宿六」を掛けて言つた洒落がある。「宿六」は「宿のろくでなし」の略称。

「一分」は一分金。金一両の四分の一に相当する。妻が乳母になり稼いだ給金である。

昔、江戸吉原で遣り手や太鼓持ちに祝儀として遣わした金も一分だった。揚げ代が一分の「二分女郎」もあつたが、決して安女郎ではなく、中位のものであつたと言う。

乳母は子の実母に代わり授乳し、養育するのがおもな仕事。乳母の亭主にとっては、たとえ相手が乳飲み子であっても、わが妻の乳房を奪われることに憤懣やるかたない思いがあつたに違いない。亭主は乳飲み子だけに嫉妬したのではない。女であり、乳母であるわが妻の気を引くため、腕に抱かれた子をあやしに来る男たちも憎かつた。

「一分取り」の語感がさらに句に艶をつけている。齒も生えていない嬰兒が、紅葉のような小さな手で乳母のふくよかな乳房を抱く。亭主は齒をむき出して女房が稼いだ一分を取る。乳房を奪い返したつもりである。

「一分」と「乳房」の音韻が、どこか通じるところがあり、さらにおかしみを感じさせる。

乳母と亭主の情を穿った句をもう一つ。

乳母に出て少し夫トをひづんで見

乳母として大家に奉公していると、自分まで豊かな人間になつたような気がして、つい夫を見下げてしまう。

古川柳では乳母は厚かましくて、ずうずうしいのが約束事。夫の不憫を氣遣う心の優しい

乳母はいないのであろか。

齒のはへた袴で守る番手桶

『誹風柳多留』四十七篇

番手の勇姿を詠んだ句である。

「番手」は城内を守る門番。「見付番」とも言う。

見付番は枳形をした城門の外側の門、「見付」で通行人を監視する者。江戸城には内部と外部の城門を含めて、俗に言う三十六見付があった。諸門の警固は大名や旗本の役とされた。最高の格式のある大手門は四十万石格の大名がその任に当たっている。

「齒のはへた袴」は菖蒲革でこしらえた袴。見付番や足輕などの下級武士が身に着けていた袴である。「齒のはへた」は「葉の生えた」のもじりで、袴に菖蒲の葉が描かれていたことによる。葉が齒に見えたのかもしれない。菖蒲の葉は剣の形をしているので、刃物の譬えにもなる。

「菖蒲革」は菖蒲の花や葉の模様を藍地に白く染め抜いた鹿のなめし皮を言う。菖蒲しょうぶの音が「尚武」や「勝負」と重なり、縁起がよいことから、袴だけでなく武具にも使われている。

「番手桶」は雑巾がけなどに使う粗末な手桶。武家では防火用を兼ねて飾り桶にした。

見付番の主な役目は城門の見張りである。その他、夏には一日中、打ち水をしなければならぬ。そのとき使うのが番手桶。炎天下での打ち水は重労働であり、先のような句が生まれたのであろう。

一方、見付番の苦労を尻目に、見付番の打ち水の手際よさをひと目見ようと、夏の暑い日には夕涼みがてら見物に来る者もあったと言う。見付番が円い番手桶を使い、四角に打ち水する姿が凛々しかったのである。

見付番を詠んだ句をもう一つ。

見附からわさびおろしが出て呵り

菖蒲模様の袴が「わさびおろし」に見えた。威張った侍をわさびおろしになぞらえたところに、江戸っ子の心意気を感じられる。見付番には二面性も三面性もあり、穿ちの対象になっても不思議ではない。

小牧山齒をむき出して御立腹

『誹風柳多留』三十八篇

小牧山は愛知県小牧市にある、標高九〇メートル足らずの小高い山である。

遠い昔、小牧山は尾州にあり、桶狭間や長久手とともに三大古戦場の一つをなした。大樹が茂り、東西に延びた地形は自然の要塞として最適だった。

戦国時代の小牧山は山頂から尾張平野を一望することが出来た。織田信長は美濃を支配するに際して地の利を生かし、永禄六年（一五六三）に清州から小牧山に移り、そこに城を築く。小牧山全体を要塞にするため、山頂から麓までの間に五段の塁砦を造り、山頂には屋敷、中腹には馬場、各要所には邸宅を置くと言う工夫を凝らしている。

天下統一の第一歩として築城した小牧山であるが、永禄十年（一五六七）、信長は斉藤竜興を攻略したあと、居城を小牧山から稲葉山に移した。小牧山が廃城となり、城主亡きあとの城下町は当然の事のように衰退する。

その後、天正十二年（一五八四）に、豊臣秀吉と徳川家康の小牧・長久手の戦が起きた。家康は信長が築いた小牧山の城跡を修復し、そこに本陣を置く。小牧・長久手の戦いは徳川軍の勝利となるが、その時、秀吉は犬山に拠点を置き、家康は小牧山に陣を取った。小牧山が歴史的に、信長・秀吉・家康と言った戦国時代の三英傑と浅からぬ因縁のある山であることは明らかである。

先の句では、秀吉と家康が小牧・長久手の合戦で睨み合った時の秀吉の心境を、「齒をむきだして」という言葉で揶揄したのである。

「齒をむき出して」は、小牧山を猿面顔の秀吉になぞらえて言っているのであろう。いずれにしても、猿面殿が立腹していることに違いはない。

猿面顔の秀吉を詠んだ句をもう一つ。

一日は柿が猿の邪魔になり

「柿」は柿原康政。徳川四天王の一人と言われた武将である。小牧・長久手の戦で徳川軍を勝利に導き、軍功を立てた。秀吉は長久手の戦いで柿原に先陣を破られ、敗れたうえ、家臣の池田勝人まで失い深い悲しみに陥る。

池田勝人は織田信長に仕えて活躍した武士。本能寺の変のあとは秀吉のもとで功をなす。戦に敗れ、大切な家臣まで失った秀吉が柿原康政に怨みを持たない訳がない。

せんだんの二齒にめして御ほうらつ

『誹風柳多留』五十五篇

「梅檀は二葉ふたばより芳かんばし」と言うことわざを利かせている。「二葉」を「二齒」ふたばともじつたところに味わい深さがある。

古くから、「迦陵頻かれうびんと云鳥いふとりは、卵中かいこなかにて鳴聲なくこゑも衆鳥しゆてうに勝すぐれ、梅檀せんたんと云樹いふきは二葉ふたばより芳かうばし」(『保元物語』一下)や、「梅檀めいたんは二葉ふたばより香かうばしく、蛇へびは一寸にして其氣を得る」(『風来山人集』根無草―後)などとあるように、二葉にまつわることわざは、もともと誉れ高きことの譬えとして用いられた。梅檀は発芽した二葉の時から芳香を放つため、英雄や俊才など大成する人は、幼い頃からすぐれた才能を発揮すると言う。

梅檀はセンダン科の落葉高木で、葉は大形の羽状複葉。各小葉は卵円形で先が尖り、鈍い鋸齒状を呈している。初夏には淡紫色の五弁花を多数付け、芳香を放つ。梅檀の木は建築材として使われるが、仏教では香木として説かれている。

「二葉ふたば」と言え、植物が芽を出す時に見られる二枚葉を想像するが、ここでは二枚葉のことを言っているのではない。二葉を「二齒ふたば」ともじつたところに、何か深い訳があるのかもしれない。

「二葉にめして」は、「高貴な二葉葵のようにお思いのようだ」と解することも出来るが、さらにひとひねりする必要があるそうだと。

齒は歳象徴であり、歳月を意味することから、「二齒にめして」は「二代目でいらつしやる」と読み取ることも出来る。さらに、齒は食の縁語であり、「めして」は「召し上がる」とも解される。

齒を食に譬えると、「親の脛を齧る」という言葉が脳裏に浮かぶ。先の句が「御ほうらつ」で結ばれているのも印象的である。御ほうらつは「放らつ」をうやうやしく言っているに過ぎない。本音は勝手気ままな二代目を齒に衣着せて皮肉っているのである。

座敷牢友達共の齒が寒し

『俳風柳多留』四十五篇

「質屋しちやの藏らいへ御來迎らいがう、若衆の戀のしすこしに、尻しりのつまらぬ尻がわれて、座敷牢ざしやうに押し込められ」(『風来山人集』根南志具佐)とあるように、昔は放蕩息子や狂人を座敷牢に閉じ込めた。「座敷牢」は牢屋のように座敷に格子を取り付け、錠をかけて監禁するところ。

先の句は後ろ盾を失った悪友どもの落胆ぶりを皮肉っている。酒や女に溺れ、借金までこしらえてしまった放蕩息子が座敷牢に入れられた。悪友は金づるを失ったのである。

「齒が寒し」は「唇亡びて齒寒し」『春秋左氏伝』僖公五年）の故事に習っている。「唇竭きて齒寒し」『莊子』胠篋きしきやう）も同じ意。

齒は唇に被われているので寒さ知らず。その唇が破れると齒はむき出しになり寒い。齒と唇は解剖学的に隣接しており、互いに密接な関係にある。どちらか一方が減びると他方も危うくなるという譬えになっても不思議ではない。

先の句では、「唇」は金持ちの放蕩息子であり、「齒」はそれに群がる悪友。

齒と唇は咀嚼や構音する時も密に連携しており、切ってもきれない関係にある。物を食べる際にも唇の助けがなければ食物は口からこぼれ落ちる。物をしゃべる時も齒がなければ齒茎音を発することは出来ない。発音だけではない。齒がなければ舌は勝手に口から飛び出す。唇だけでは舌の齒止めは効かない。口は齒と舌と唇が備わっていて初めて正しく機能する。

「唇齒輔車」『孫楚』為石苞与吳王書）も相互扶助の精神を説いた故事。「輔車」は車輪を補強するための添え木。「車」は下顎を意味することから、「輔」は上顎の意であると解される。上顎と下顎も、唇と齒のように、密な協力がなければ円滑な咀嚼機能は發揮出来ないと言っている。

咀嚼時の顎は上下ともに動いているように見えるが、実際に動くのは下顎のみである。上顎は頭の骨で固定されているので微動だにしない。唇は自由に動くが、齒は静止している。お互いが勝手気ままに活動したのでは相互扶助の精神は生まれない。どちらか一方が恒心を貫かなければならない。

唇と齒の関係は放蕩息子と悪友の間だけに成り立つのではない。

座敷牢母も手錠がものは有

右の句にあるように、母親が唇の役目を果たし、放蕩息子が齒の立場を取ることもある。座敷牢に押し込められた息子に非はあるが、息子を甘やかして育てた母親にも罪があり、幫助罪で手錠に値すると皮肉った。

唇齒の関係はいろいろな人間模様が織り込まれており、その解釈は一筋縄ではない。善もあれば、悪もある。

物くひがよくて下齒がすはりかね

『誹風柳多留』八十四篇

摘まみ食い上手の男を揶揄している。いつも女房をはらませているのである。

「物くひ」は物を食べることに、女性との交わりを持つことを掛けて言った洒落。両者ともに食いはぐれがないと言うこと。食と歯が縁語であるのも利いている。

先の句を、摘まみ食いばかりするので、下の入れ歯の具合が悪くなったと解するのは無粋。「下歯」は女房の意である。妊娠するとおなかが大きくなり体の安定が悪い。よろよろする。そのような状態が幾度となく続き、すわりかねないのである。

「したば」の語源は「下端」にあるという。室町時代は「下場」の字を当てていたようだ。

下端は物の下の部分を意味することから、「下っ端」の語感が強いのは否めない。「下歯」と「下端」は同じ意であるとなると、女房を卑しめて言ったことになる。

上歯には夫の譬えはないが、昔の男は妻を下歯と言ひ、自分は妻より上位にあると思ったのである。男女同権の今は、口が裂けても下歯などとは言えない。

下歯は上歯の下にある歯と見るから差別が生じる。角も立つ。上下の歯の位置ではなく、それぞれの動きに着目すれば両者の関係は互角になる。動作の違いは優劣の差ではない。役割分担に他ならない。

口の開閉時に動くのは下の歯である。上の歯は梃でも動かない。下歯が働き者の女房に譬えられてもおかしくない。亭主とも言うべき上歯はどんな時でも動じない。恒心を貫く。上歯がぐらついたのでは、上下の歯はうまく噛み合わない。上歯はどっしり構える必要がある。上下の歯が正しく噛み合えば夫婦円満の証になる。下歯の称は決して差別用語ではない。区別用語である。立派な誉め言葉と言ってよい。

賣上は稲こきの歯にくわへさせ

（『俳風柳多留』初篇）

農民の悲哀を詠んだ句であることに違いはない。「稲こきの歯」の解釈の仕方によっては少しところが和む。

「稲こき」を稲穂から粃を抜き落とす「稲抜き」と考えると、「歯」は稲抜きの歯と解される。稲抜き用の道具には「抜き箸」と「千歯抜き」があるが、歯があるのは千歯抜き。

千歯抜きは江戸時代前期末に考案されたとされている。割った竹を横木に櫛の歯のように並べて打ち付けたものを言う。竹と竹の間の隙間に稲穂を入れて粃を抜き落とすのである。千歯抜きが現れるまでは稲抜きは抜き箸で行っていた。抜き箸は二本の竹棒を合わせて一端を縄で縛り、反対側を片手に持ち、竹棒の間に稲穂を挟んで粃を抜き落とす。

江戸時代の農民は自給自足を強いられ、生活は極めて厳しかった。幕藩体制の中、高い税率の年貢米を領主に納めなければならない。農民は自分の生活のためでなく、貢租納入のために働いたと言っても過言ではない。米中心の経済の中で農民は不動の存在であったが、皮肉にも日常生活は苦しくて米を口にすることも出来なかった。江戸時代、農民は総人口の八割を占めていたことを考えると、いかに農民が幕府に寄与していたかを伺い知ることが出来る。

江戸時代の農民は商いをするのを固く禁じられた。日銭を稼ぐことの出来なかった農民を思うと、先の句にある「賣上」は収入ではなく、「收穫」であると解することが出来よう。日頃、粟や黍しか口にすることが出来なかった農民は收穫した米を売り上げと見做し、稲扱きの歯にくわえさせて、いつまでも手元に置いておきたかったのかもしれない。

農業専一を基本原則としていた農民は江戸後期になると、農間余業として出稼ぎや農作物の販売などが自由に行われるようになる。農民の暮らしに少し経済的なゆとりが出来た背景を考えると、先の「稲こきの歯」の解釈におのずと変化が生じる。

稲扱きの竹の歯と解したのが、稲扱きをしている人間の歯に転じたとしても不思議ではない。農作業の中でも比較的軽作業の稲扱きは女や子供が行っていたことを考えると、先の句は農夫と農婦のほのぼのとした仕ぐさを詠んだものと解釈することが出来る。

菜売りに出かけていた夫が帰って来た。売り上げを女房に渡そうとするが、あいにく女房の手は稲扱きでふさがっている。仕方なく売り上げ銭を女房の歯にくわえさせたのである。当時、「胡麻の油と百姓は絞ればしぼるほど出るもの」と言った理不尽な言葉があったことを思うと、稲扱きの歯の解釈の違いなど洒落にもならない。

くきづけをくいに半日歯をいじり

『誹風柳多留』二十二篇

「くきづけ」は「茎漬け」。香の物の一種。大根やかぶなどの茎菜を茎や葉と一緒に塩漬けにした物を言う。

「神無月の初めより、山道を埋み、人馬の通ひ絶て、明の年の涅槃の比迄は、おのづから世うじん しほさばうり こゑ きか の精進して、塩鯖賣の聲をも聞ず、莖桶の用意」『日本永代藏』一一二とあるように、昔は冬季の食用として茎菜を漬け込んだ。

「莖桶」は茎漬け用の桶。

歯の悪い者が茎漬けなどの香の物を食べると歯に挟まり、それを取り除くのに苦勞する。

歯が悪いと言っても、むしろ歯ではない。歯茎が痩せて歯と歯の間に隙間が出来るのである。隙間はなくても歯周病で歯がグラグラすると、やはり食べ物が挟まりやすい。

先の句は茎漬けが歯の間に入り込み、それを楊枝で取り除くのに半日かかったと悔んでいる。香の物を口にする前から、自分の歯ではきつと歯に挟まってしまいうと案じていたのが現実になった。茎漬けを「食いに」に、「悔いる」を掛けて言った洒落はあるが、寂しさも同居している。

楊枝は江戸時代には房楊枝と爪楊枝があった。房楊枝は楊枝の先端が房状になっており、房の部分を使って歯を抜き、歯を磨くのである。爪楊枝は楊枝の先が尖っており、歯をせせったり、歯に挟まった物を取り除くのに便利な形をしているのが特徴。

初霜や茎の歯ぎれも去年迄

『文化句帖』文化三年

今年はめつきり年老いてしまった。去年までは噛み切ることの出来た茎漬けも、今は歯切れよく噛み切ることが出来ないと嘆いている。

急に歯が抜けるか、歯並びがゆるみ、歯に隙間が出来たのであろう。

右の句は小林一茶が四十三歳の時に詠んだものである。

四十三歳はまだ老け込む歳ではない。

一茶は元来、強健な肉体の持ち主であったようだ。ところが老いが早く、四十代からしきりに老化を意識し、嘆いていたと言う。突如として現れた歯や目の衰えに困惑したのかもしれない。

一茶は文政十年（一八二七）、六十四歳で没している。

獺の歯を寒くさせたる富士の夢

『俳風柳多留』五十三篇

初夢を詠んだ句である。

初夢はその年の吉凶を占うものとされており、昔から「一富士二鷹三茄子」が吉夢と言われて来た。中でも富士山の夢が一番だと言う。

富士山は浅間信仰の厚い霊山。鷹は「鷹は死すとも穂はつまず」という言葉があるように、高潔で逞しい人の譬えとして用いられる。茄子は実を結ばない無駄な花が少ないことから、縁起のよい食べ物とされている。どれも初夢にふさわしい物である。

初夢は中世頃には節分の夜から立春の明け方に見るものとされていた。京阪地方では江

江戸時代まで、この仕来りに従っている。

江戸では大晦日の夜か元旦の夜、あるいは二日の朝に見る夢を初夢とした。必ずしも特定の日にこだわっていないのが面白い。江戸後期になり、正月二日の夜に見る夢を初夢とし、現在に至っている。

昔は、「夢は五臓六腑の疲れの表われ」と言われており、せめて初夢は縁起のよいものを見たいと願ったのであろう。縁起のよい夢を見るため、宝船の絵を枕の下に敷いて寝ると言う風習もあった。七福神の乗った宝船が来るよう祈ったのである。

たから舟しわに成るほど女房こぎ

右の句は少々、品位に欠けるが、宝船の絵を枕の下に敷いて、吉夢を願っていることに違いはない。

正月二日の夜は姫初めでもある。

冒頭の句にある「獺」は中国の想像上の動物。人の悪夢を食ってくれると言う俗信があり、獺の絵を枕や枕屏風に描いた。室町時代の宝船の絵には「獺」の文字が一緒に書かれていたと言う。獺に悪夢を食ってもらい、災厄を避けたいと願ったのである。

ところが、凶夢を食うはずの獺が自分も吉夢にあやかりたくて、初夢に出てきた霊峰・富士を欲深く口にしてしまった。冠雪した真っ白な雪に獺の歯は寒くなり、心身ともに凍えおののく。

獺が吉夢を食った句をもう一つ。

富士の夢裾分けをする獺仲間

獺も時には吉夢を食べたい。霊峰・富士山を食した。

富士の「裾野」と「お裾分け」を掛けて洒落ているが、穿ちに乏しい。

折ふしは小粒もあたる遣手の齒

『俳風柳多留』初篇)

「折ふし」は「折節」。時折の意。「小粒」は一分金の異称。金一両の四分の一に相当する。

「遣手」は妓楼で若い遊女やりての教育や監督、茶屋での交渉、遊客との応対など一切を取り仕切る女性。多くは遊女上がりの中年の者がその任に当たった。

「あつちらの大盡じんがやけをおこして、やりてや廻しをよんで、こごとをいふうちの心持こころもちのよさは、どうやすくふんでも、五六百兩がものはあるのさ」(『黄表紙』江戸生あどむまれうわきの艶氣權かばやき焼)とあるように、遣手は遊客の苦情なども「廻し」と呼ばれる雑用係の男と一緒に聞かなければ

ばならない。「大盡」は大臣、あるいは大尽とも書き、金持ちの遊客を言う。

妓楼では客が床で遊女に「床花^{とこはな}」と言う祝儀を与えるが、その時、遣手も一分金の恩恵にあずかる。床花は、客が遊女と馴染^{なじ}みになったしるしに、三会目に遣るのが通例。上級遊女になると、登楼してすぐに床入りすることはない。初会、二会目、三会目の段階を経なければ、馴染みになれなかった。初会を入り目、二会目を裏約束^{うらのやくそく}、そして三会目を床花とも言う。

床花は「まづ三會めの客をつとめ、もはや床花^{とこはな}の三兩もしめてきたゆへ、大の平氣なり」(『洒落本』傾城買四十八手)とあるように、かなり高額である。遊女は遊客に「床花のかへし」として、茶屋を通して煙草一包を贈る習慣もあった。

昔は祝儀の金を着に混ぜ合わせて、箸に挟んで振る舞う風習があつたようだ。先の句で「小粒もあたる遣手の齒」とあるのは、遣手が時折、金銭に出くわすことと、実際に着の中の一分金が遣手の齒に当たることを掛けて言つた洒落であろう。

齒に當たる着を遣手嬉しがり

右の句も遣手の貪欲な金銭感覚を皮肉つたものと言つてよい。遣手が金に目がないのは江戸川柳では当然の約束事である。

遣手の金銭への執着ぶりを揶揄した句をもう一つ。

巾着とやり手一所に口をあき

遣手婆と言われても仕方がない。

齒がぬけたそうでをかしい牛房賣

『俳風柳多留』三十三篇

「房」は「莠」の当て字。

牛蒡売の爺さんが、いつもは「ゴボウ、ゴボウ」とはつきり言つて売り歩いていたが、齒が抜けたためか、「ゴボウ」に聞こえず、長屋の連中が笑っている。

齒がなければ何かと不自由である。齒は食物を噛み砕くだけでなく、言葉をこしらえる時にもなくてはならない器官である。齒が欠けると、舌と唇による言葉づくりの共同作業がうまく行かない。

前齒を失うと「サ行」の音が正しく出ない。奥齒の喪失は「ラ行」の発音を難しくする。齒が全部なくなると、さらに言葉をこしらえるのに苦労する。「マ行」の音が「バ行」に化けてしまう。その逆もある。「バ行」が「マ行」に変身する。

例えば、「ツミ」と発音したのが「ツビ」になり、意味不明の言葉に聞こえる。「ウカビ」

は「ウカミ」になり、浮かびたくてもうかばれない。罪づくりの言葉になってしまう。

昔から、歯が欠けると「歯もり」(『人情本』春色梅児譽美―三) がすると言われていた。

歯もりは、歯の欠けたところから漏れる不明瞭な言葉を言う。歯もりがすると、老婆が「なむあみだぶ、なむあみだぶ」と唱えたつもりが、「にやんまみじやぶ、にやんまみじやぶ」(『滑稽本』浮世風呂―前) に聞こえる。これでは御利益はなからう。

歯が欠け、さらに舌や唇や咽の力が衰えると、口から出る言葉は思い通りに伝わらない。

歯抜けの爺さんが「ゴボウ」と言ったつもりでも「ゴボウ」に聞こえない。耳のいい長屋の住民には、とんでもなく可笑しな言葉に聞こえたのであろう。

「ゴ」は歯があってもなくても、咽の力さえしつかりしていれば正しく発音出来そうだ。

「ボ」は「ホ」に変じて「ゴホウ」になったとしても、それくらいで笑いを誘うとは思われない。

歳を取り、咽の力が衰え、「ゴボウ」と正しく言ったつもりでも「ゴボウ」にならない。

「ゴボウ」が変身して「ボボウ」に聞こえたのかもしれない。

「ボボウ」は「ぼぼ」の響きに似ており、笑いの原因になっても可笑しくない。「ぼぼ」は女陰の異称であり、牛蒡は男根を意味する。精も尽き果てているであろう爺さんが「ボボウ、ボボウ」と不明瞭な声を張り上げ、精のつく牛蒡を売っている。男女の卑猥な言葉を連想して、笑わないほうが可笑しい。

うら中の笑ひ歯ぬけの午房うり

右は歯ぬけの牛蒡売りの類句。

「うら中」は裏長屋の意。「午房」は牛蒡の当て字であろう。

親の恩歯がぬけてからかみしめる

『誹風柳多留』三十六篇

親に孝を尽くし、老後の面倒を見ようと思った時には親はすでに死んでいて居ない、と言う「風樹の歎^{ふうじゆたん}」を下敷きにした句である。「風樹」の出典は『韓詩外伝』の卷九。

「歯を噛みしめる」と言う比喻はあるが、「歯がぬけてからかみしめる」と言った表現が面白い。歯がなければ噛みしめることは出来ない。

「歯がぬけてから」は、単に歯が抜けたあとのことを言っているのではない。歳を取ることの譬えとして言っているのである。

歯のある若い時は親の恩など全く噛みしめたことがない。歳を取り、歯が欠け、親のあり

がたさが分かった時には、親はすでにこの世に居ないと嘆いている。

「往ゆきて来たらざる者ものは年としなり。再またび見るべからざる者ものは親おやなり」『孔子家語』致思も中国にある故事。

過ぎ去って帰らないのは歲月。二度と会うことの出来ないものは親であると説いている。子が親孝行をしようと思った時には親はすでに他界していて、この世にいないと言うのであろう。

中国には親を敬う言葉が多い。俗信であるが、「子こを持ちて初はじめて知る父母ふぼの恩」も中国にある教えである。

さればとて石にふとんはかけられず

右の句は江戸中期、播磨の国の滝瓢水ひょうすいと言う俳人により詠まれたものである。外山滋比古先生に教わり、初めて知った。

先の句とは対称的に、親の恩を冷静に受け止めていると解してよからう。

親の恩は十分に噛みしめている。親が死んでしまった今は何の孝も施しようがない。こころの中では、せめて墓石に蒲団だけでも掛けてやりたいと思っているが現実的でない。凡人の業を代弁しているような句である。

子は親の思い通りに育つとは限らない。子は親に似ると言う。歯が抜けてからしか親の恩を噛みしめない親の子は、やはり親の恩は歯が抜けてからしか分からない。

歯はないが嫁をばひどくかみつける

『誹風柳多留』三十五篇

年老いて歯のない姑が嫁を噛みつくように叱っている。姑の嫁いびりを揶揄したものであるが、歯のない者が噛みつくと言った理屈っぽい皮肉が利いている。

昔から、「嫁と姑の仲の良いのは物怪もっけのうち」と言われるくらい、両者は仲が悪いものだと決めつけられている。嫁と姑の言い分は交わることなく、常に平行線をたどると言っても過言ではなからう。平行線と言っても言い分は平等ではなく、どちらかと言えば姑のほうに理不尽な小言が多い。嫁が気に入らなくて悪態をつくのではない。最愛の息子を取られたと勝手に思い、悔しがるのが嫁いびりの最大の原因。

「飯のあらと嫁のあらは少しでも歯にかかるとは嫁いびりを象徴したことわざ。飯に混じった粃殻は、たとえわずかであっても歯にひっかかる。それと同じように、嫁の取るに足らない落ち度でも、姑のところにひっかかる。嫁が失敗でもすれば、これ見よがしに襲いかか

る。憎まれ口をたたき、勝者を気取るのが姑のあるべき姿。

姑は最初から意地悪な姑であつた訳ではない。嫁が姑になるのである。姑思いの嫁があれば、嫁に優しい姑もいる。嫁と姑の関係は犬猿の仲ばかりではない。

子に搾り餌御齒なき母へ上る乳

右の句は齒のない姑を氣遣う、こころの優しい嫁を詠んだもの。自分の子には鳥の搾り餌のような粗末な食べ物を与えておけばよいが、母上となると、そうはいかない。齒がなければ固い物は食べられない。自分の乳はすでに上がつて出ないが、せめて乳房だけでも含ませてあげたいと思う。嫁に優しい姑は姑思いの嫁に出会うのであろう。

嫁と姑の仲のよいのは美談に近いが、姑の氣に入る嫁は必ずしも幸せとは限らない。

姑の氣に入る嫁は世が早し

自分の命を削つても姑のお氣に入りになろうと努力する嫁を詠んでいるのではない。それでは穿ちに乏しい。

「佳人薄命」という言葉がある。美人の嫁も早死にすると言うのである。

齒のなくなるまで長生きした姑は、どのような美貌の持ち主だったのであろうか。

耳に齒もなくて何かを聞きかぢり

『俳風柳多留』五十三篇

断片的で底の浅い、聞き齧っただけの軽薄な知識を嘲笑している。

「何かを」が「何かと」であると句がしまる。外山滋比古先生のご助言。

耳には齒はないが、聞き齧ると言つた理屈っぽい言いまわしが面白い。齒があつてこそ物が齧れるのに、齒のない耳に何が齧れる。齧れるはずがない。齧れるのは齒である、と言いたいのであろう。

耳による「聞きかぢり」は耳で聞く比喻。齒があつての話。ところが耳には齒がない。齒がなければ齧ることは出来ない。「齧る」は底の浅い知識を身に付けることの比喻でもある。このように、一つの句の中に比喻の比喻とも言ふべき工夫があるのは注目値する。

「齧る」と言えば、すぐにリンゴの皮を前歯で齧り取る動作を想像する。奥歯では「噛む」と言い、齧るとは言わない。齒にはそれぞれ役割分担があることを暗に示している。

物を齧る時も、噛む場合も、齒の動きは基本的には同じである。齧る時は前歯を小刻みに動かし、噛む場合は奥歯をしつかり合わせる。前歯で齧る時、齒が物に深く入ったのは目的は果たせない。スコップのような平らな形をした前歯で、表面を少しずつ丹念に削り取ら

なければならぬ。口の奥にある臼のようにどっしりした臼歯には出来ない離れ業である。齧るとは、しよせん浅くて軽い行為。噛むとは歯の動きも、意味合も違う。

「齧る」という言葉は、ある専門分野の勉強を始めたが、すぐにやめてしまう譬えとして使われる。言葉としては、はなはだ分が悪い。「聞き齧る」となると、さらに聞こえがよろしくない。表面的で底の浅い知識として軽く見られる。

「伝えて聞き、学びて知るは誠の智にあらず」(『徒然草』一三八)とあるように、昔から耳を通して身に付けた知識は「耳学問」と言われ、高く評価されない。ましてや聞き齧っただけの知識となると、兼好法師は歯牙にも掛けなかったであろう。

豆を喰ふ歯も無く成つて鳩の杖

『俳風柳多留』六十篇

豆も食べられないような老人になってから名誉ある鳩の杖を授かっても嬉しくない。もつと若い時に欲しかったと嘆いている。

「歯も無く成つて」は「歳を取つて」の比喻。「豆」は女陰の異称。歳を取ると、その豆さえ食べることが出来ないとも言っている。豆と鳩は縁語であり、歯がなくなつて豆も食べられなくなつた老人を、豆の好きな鳩になぞらえているのが利いている。

「鳩の杖」は、杖の上部に鳩の飾り物が細工された「檀木杖」(とうぼくつえ)。『後漢書』(ごかんじょ)の「礼儀志」に見られる杖を言う。

昔、中国では、功労のあつた八十歳以上の老臣に宮廷から慰労の品として檀木杖を授けた。檀木杖に付いている鳩の飾り物は、鳩は餌を食べる時むせることがないと言うことから、縁起物として施されている。

わが国でも鳩の杖は、(八幡山神やきりけむ鳩の杖、老いてさかゆく道のためとて)『夫木和歌抄』(ぼくわかしよう)と詠まれている。その他にも、「衣冠正シクシタル老翁ノ、年八十有余ナルガ、左ノ手ニ梅花ヲ一枝持、右ノ手ニ鳩ノ杖ヲツキ、最苦シゲナル體ニテ」(『太平記』一六)とあり、鳩の杖の引用が目を引く。

歳を取ると歯が欠け、物を食べるのが不自由になる。舌や咽の機能も低下して嚥下に支障を来たす。

咽が正常に働いていれば飲食中に物が誤つて気管に入ることはない。食事の時、飲食物が気管に入り、むせるのは、加齢に伴う咽の周りの筋肉の衰えも一因になる。

むせる、すなわち、咳反射は決して悪い生理現象ではない。生体の防禦反応の一種であり、

異物を生理的に体外に排出する動作である。誤嚥あるいは誤飲した飲食物を咳反射により、気管外に排除しようとする努力と言ってよい。

加齢により咳反射の機能が低下すると食べ物が入り、誤嚥性肺炎を惹起しやすい。先の句にあるように、高齢者が縁起物の鳩の杖を授かるのは、昔から嚥下障害に苦しむ老人が多かったことを物語っているであろう。

齒のぬけためかけ當主の脚をなめ

『俳風柳多留』二十八篇

歳を取った妾^{めかけ}の哀れな姿を詠んでいる。可笑しくもあり、わびしくもある。

「齒のぬけた」は、齒が抜けてなくなっているだけでなく、歳を取っている譬えでもある。

「めかけ」は、正妻ではないが、「當主」、すなわち旦那と妻のような関係を持ち、扶養してもらう女性。「目を掛ける」に由来すると言う。俗に言う二号。

先の句では、「當主の脚をなめ」の解釈に工夫がいる。妾が「當主の脛を齧る」と言えば、明らかに旦那の金銭に依存していることであり分かりやすい。しかし、齒がなければ比喻とは言え脛は齧れない。それでは「脚をなめ」とは一体、何を意味するのか。

「脚をなめ」を、そのまま妾が旦那の脚をなめていると解したのでは無粋。脚は痛くも痒くもない。歳を取った男と女の戯れごとであっても、少しは色気が欲しい。思い切って、男の股間にある第三の脚を年老いた妾が献身的になめている、と想像を膨らませて見てはどうか。

「齒のぬけた」は、年寄の譬えであるが、実際に齒がなければ脚をなめるのに好都合である。若い時は丈夫な齒で旦那の脛を齧ったが、今は年老いて役に立たなくなった脚をなめている、と解釈すると可笑しみが沸く。昔は享樂のために齒を抜き、男に尽くす行為があったと言うから、笑いたくてもわらえない。可笑しみを越えて寂しささえ覚える。

老のみとなるこの瓜の今は

^{はや}早婆々でなければ齒にあはぬなり

『徳和歌後萬載集』一十

右も、歳は取ついても色欲は健在な老人を詠んだもの。若い時は誰でも相手に出来たが、今は若い女には齒が立たないと嘆いている。当然のことであろう。身の程を知るべし。

「瓜」は女陰の隠語。

老女と言えども、最初から枯れていた訳ではない。若い娘が歳を取り、衰えたに過ぎない。

脛を齧る歯も揃っていた。歯が抜け脚をなめるなど想像もしなかったであろう。

歯のぬけたそろばんのある村しちや

『誹風柳多留』四十篇

田舎のみすばらしい質屋を詠んだものであろうが、なかなか奥が深い。

「歯のぬけたそろばん」は、そろばんの珠が軸からはずれて使えなくなっているさまだけを言っているのではない。当時の生活苦を物語っており、江戸庶民は質屋にも行けなかったことを暗に示している。壊れたそろばんであっても、使う機会がなければそれで用は足りるのである。

江戸期の質屋は衣類や家財道具でも質種として取り扱った。町人は気軽に質屋を利用出来たのである。質屋は町人だけでなく、武家も出入りしており、身分を越えて生活に根ざした金融機関として重宝にされた。

元禄十四年以降の質置きの期限は、刀・脇差・諸道具などが十二か月、衣類は八か月であったと言う。利率は銭百文に対して四文というのが当時の相場だった。

先の句にある「そろばん」は、そろばんの軸が枠から外れて珠が抜け落ちている。あたかも老人の顔を見るようだったのかもしれない。歯の欠けた口元は人間の老化を表わすように、珠の抜け落ちたそろばんは商いの衰退を物語っていると云ってよからう。人間の歯であれ、そろばんの珠であれ、それらの欠落は、それらの命とも言うべき固有の力を失うのに似ている。人間の歯は生命力、そろばんの珠は経済力の象徴であると言ってよい。

幕府の重圧下での庶民の生活は苦しくて、質屋にさえ通えない貧しい者もあった。質屋は世相を反映するが、中には繁盛した質屋もある。

ごみごみの中の白壁質屋なり

先の句とは違い、元気な質屋を揶揄している。

「白壁」は財力の証であり、白壁造りの土蔵を意味する。ごみごみした下町だからこそ、質屋が必要であり、その質屋が繁盛した。村質屋とは違い、威勢よく、そろばんをはじく音が響いたはずである。

能いむすめ惜しい事には歯が黒し

『誹風柳多留』八篇

美しい娘は歯が白くなくてはいけないのに、汚れていて黒い。白歯の生娘と思っていたが残念ながら既婚者であり、お歯黒を付けている。両者を重ねて言った洒落はあるが、歯が黒くてがっかりしていることに違いはない。

昔から、歯が白いことを「皓歯こうし」と称し、美人の要素の一つにした。「明眸皓齒めいぼうこうし」『哀江頭』杜甫）と言えば、明るいひとみと白い歯を兼ね備えた美人の相である。杜甫が美しい楊貴妃を詠んだ故事による。

わが国でも『假名草子』の「尤之双紙」に、きれいな品々の一つとして「若衆の歯はの白き」が挙げられている。一方、きたらしい物の一つに「若衆の歯がすみ」が見られるのは、江戸の若衆は楊枝を使い歯を白くするのを粹と考えたことに他ならない。

先の句の「歯が黒し」を、歯が歯垢などで黒く汚れていると解したのでは片手落ちになる。既婚婦人のしるしである「お歯黒」を付けているのかもしれない、とも考えなければならぬ。両者を重ねることで、川柳らしい解釈が成り立つ。どちらか一方の意に決めつけるほど野暮な思考はない。

氣立ても器量もよい娘なのに、歯が黒いと落胆しているのは事実である。お歯黒が既婚婦人を表すのに対して、未婚の女性は「白歯しは」と称され、歯を黒く染めることはなかった。白歯は芸者や踊り子の俗称であるが、普通は無垢な娘を言う。

染めぬ歯と画ぬ紙の面白し

右は色気知らずの生娘きむすめを詠んだ句。

まだ何も書いていない真っ白な表紙に、自分の好きな絵を自由に描くのは楽しいことだ。それと同じように結婚前の白い歯の娘も、男の教育次第でどのようにも染めることが出来ると喜んでいる。

歓喜するのは勝手である。色気知らずの生娘が必ずしも良妻賢母になるとは限らない。

「久しく色氣白歯いろけしらの生娘きむすめ、いやみなしにて有けるありものが、年としをかぞへて今ははや、流れながてよどむ婦多川ふたかはに、數かぞへられたる苦勞人くらうにん」『人情本』春色辰巳園―三二。

右の一節にあるように、色恋の経験のない生娘であっても、月日が経てば白歯の芸者家業で苦勞しなければならぬこともある。人の一生には計り知れないものがあるのがこの世の常である。

向ふのかねで歯をそめるいゝ娘

『俳風柳多留』四十九篇

「向ふのかね」は「向ふの金」と「向ふの鉄漿」を掛けて言つた洒落。「向ふ」は嫁ぎ先の意。鉄漿はお歯黒を言う。

先の句は、娘が先方に見初められ嫁入り支度も相手持ちとなり、それを喜ぶ親心を揶揄している。娘が玉の輿に乗つたのである。

昔、女性に婚約あるいは結婚すると、お歯黒を付ける風習があつた。初めてお歯黒を付けることを「初鉄漿」と言う。初鉄漿の時は、その儀式を世話する「鉄漿親」と言う親代わりの婦人が執り仕切つた。鉄漿親は初鉄漿に必要なお歯黒道具一式も準備した。鉄漿親には親族や知り合いの中で、徳のある人になつてもらうのが習わし。鉄漿親は男子の元服の時の烏帽子親に相当する。

初鉄漿は婚約した時に行くこともあるが、普通は結婚後に行つた。結婚後の初鉄漿は妊娠か出産後にしたと言うからおおらかである。初鉄漿の時期が婚約から出産と、かなり幅があるのは夫の希望に従つたからだと言う。いづれにしても初鉄漿に際しては、「鉄漿水」と言うお歯黒水を七か所で貰う不思議な風習があつた。

お歯黒をくんと顔をもうかくし

生娘にとつて結婚は嬉しくもあり、恥ずかしくもある。結婚が決まつたあとの初鉄漿は、お歯黒水を貰いに行くだけでも恥ずかしい。嫁になると振袖を切つて留袖にするが、最後の振袖で恥じらう顔をかくしたのであろう。

初鉄漿にまつわる句をもう一つ。

御歯黒を貰ひに行つて綿を入れ

お歯黒水は無償で貰うことが出来るが、何かお礼をしたいと思うのが人情であろう。お歯黒水を貰いに行った先で丁度、綿入れをしていた。お礼のしるしに綿入れの手伝いをしたのである。

蒲団の綿を入れ替えていたのかもしれないし、冬支度のため、丹前などの綿入れをしていたのかもしれない。どちらにしろ、感謝の気持ちを込めて手伝つたことに違いはなからう。

七か所で貰つたお歯黒水はお歯黒壺に入れて嫁入りする時に持つて行く。

お歯黒はしくくかぶる内につけ

『俳風柳多留』三篇

「かぶる」は「齧る」と書く。『大辞林』（三省堂）によると、齧るは「虫がかじるためと

考えたことから、腹がしくしく痛むこと」とある。ここでは、そのような腹痛ではなく、陣痛の前ぶれとして、腹がしくしく痛むと解するのがよい。

お歯黒は江戸時代には既婚婦人のしるしとして付けていたが、付ける時期は常に定まっていた訳ではない。結婚して子供が生まれたあと、初めてお歯黒を付ける場合もあれば、子供が二、三人出来てから付けることもあったようだ。

先の句を産褥に入ると自分の間お歯黒を付けることが出来ないのも、女の身だしなみとして急いで歯を染める、と解釈したのでは穿ちに乏しい。何か訳ありの、にわかお歯黒であると解するべきであろう。

お歯黒を俄につけてとがゞ知れ

歯を黒く染め、眉を落とすのは堂々たる人妻の風俗。しかし、右の句も先の句と同じように、訳あつてお歯黒を急いで付けなければならない。勘ぐられても仕方がない。

人目を憚ることなく夫婦の契りを結んだ結婚であれば、いつ歯を染めようが、いつ出産しようが自由である。ところが、「とがゞ知れ」とあるように、訳あつて急にお歯黒を付けなければならなくなった。何か人に言えない訳ありの出産を控えているのであろう。「とが」は「咎」と書くので、不義の妊娠なのかもしれない。

妊娠して慌ててお歯黒を付けたからと言って、すべてが疚しいお歯黒染めではない。生れ出るわが子を思い、俄かに歯を黒く染めることもあったようだ。

嬰兒にとつて初めて見る母親の顔が鬼のように怖い顔をしていたのではかわいそうである。角に見える真つ黒な眉を落とし、牙のような真つ白な歯は黒く染めてお産に備えた。これでわが子は安心して乳飲み子になれると、安堵して母親は胸をなでおろしたのであろう。地方にあるお歯黒の伝説であるが、親心として一考に値する。

江戸川柳でお歯黒が真面目に取り上げられることは少ない。どちらかと言えば、皮肉や滑稽な題材として詠まれる場合が多いようだ。嬰兒に罪はないが、俄かお歯黒は出生の秘密を穿った絶好の題材になりやすい。

湯殿さん歯黒へ御手が付き初め

『俳風柳多留』四十九篇

大名などの浴室係の女中が主人の御手付きになり、玉の輿に乗るかもしれないと揶揄している。

「湯殿さん」は殿様に仕える浴室係の女中。将軍は小姓を従えて御湯殿に入るが、ここで

はれつきとした女性を伴つての入浴である。

「齒黒」は女性の陰部の黒と、女中が側室または本妻になり、齒を黒く染めることを重ねて言った洒落。主人が女中の黒いところに手を付けたので、女中は御手つきの証としてお齒黒を付ける。

江戸時代は町人のほとんどが湯屋と言う銭湯に通った。豪商でも自宅に風呂があるのは少なかった。火事を恐れたからである。

武家には風呂があり、浴室係の女中は湯を沸かし、主人の背中を流す。入浴後は浴衣の用意もする。主人と女中は極めて近い関係にあった。

御湯殿でそちらも入れとおじやらつき

右の句にあるように、殿様と垢を落とす女中の間に何が起きても不思議ではない。

先の句を浴室係の女中と主人のじゃれごとと解したのでは低俗すぎる。「湯殿さん」を「湯殿山」、「齒黒」を「羽黒山」に読み替えると格調が高くなる。

湯殿山と羽黒山は月山とともに出羽三山を成す。三山の奥の院は湯殿山とされているが、古来、山岳信仰により、湯殿山には神殿はなかった。湯が湧き出る巨石をもつて御神体としている。三山を巡拝する者は湯殿山を最後に拝し、所持金はすべてそこに奉納すると言う習慣があった。帰宅後は、山での見聞は誰にも言つてはいけないという不思議な習わしもあったようだ。

冒頭の句では、湯殿山と羽黒山が殿様と浴室係の女中のように近い関係にあることを利かせている。殿様は女中の下の黒いところに手を付け、女中は上のお齒黒に手が届いたのである。

湯殿さんの出世ぶりを皮肉った句をもう一つ。

御湯殿は玉の輿への上り口

雲の上車の齒迄黒くそめ

『誹風柳多留』四十九篇

朝廷に仕える公家の忠君ぶりを揶揄している。

「雲の上」は庶民とはほど遠い高貴な世界を意味することから、朝廷の比喻として用いられる。

「車」は牛車。ぎしん平安時代の貴人が乗用した車を言う。牛車にはいろいろな種類があり、用途や身分の違いにより使い分けた。「齒」は牛車の黒塗りの大輪おおわの意であり、車輪の譬え。

「御位そひて牛車うしぐるまゆるされて」(『源氏物語』薄雲うすぐも)とあるように、官僚の序列が昇進すると、牛車に乗ったまま宮門の出入りが許された。摂政や関白になると、一部の者ではあるが、建礼門まで牛車で乗り入れることが許されたと言う。

先の句では、お歯黒を付けた公家が、あたかもお歯黒を塗ったかのような黒い大輪の牛車に乗っていると嘲笑している。お歯黒は古くは上流社会の婦人たちの間で付けられていたが、院政期頃になると、貴族の男子もお歯黒を付けるようになった。

公家がお歯黒を付けるのは、黒は変色しないことから、「忠臣二君に仕えず」の精神を表すものだった。忠義に疎い庶民は、公家の乗る牛車まで君に忠を尽くしているように見えて滑稽だったのである。

牛車を詠んだ句をもう一つ。

染めた歯をきりくと噛む破れ車

『源氏物語』の「葵」を下敷きにした句である。

「破れ車やぐるま」は、葵あおいの上と六条御息所みやすむろの牛車みやすむろが加茂の祭りで「車争い」をした時に破れた車と言う。牛車が破れ、黒塗りの大輪がキリキリと軋む音を、殿女の争いで生じる歯ぎしりの音になぞらえたのである。

葵の上は夕霧を生んだあと、六条御息所の生き霊に取りつかれて急死した。

昔、女が人を呪うとき、お歯黒を付けて鉄釘や楊枝をくわえて念じたと言う。六条御息所も、そのようにして葵の上を呪い殺したのかもしれない。

くろい歯へあてる小粒はほまちなり

(『俳風柳多留』三十二篇)

主婦が思わぬ臨時収入にありつき喜んでいるさまを揶揄している。

「くろい歯へあてる」は、「くろい歯」と「歯へあてる」の二つの意味が重なっている。黒い歯は既婚婦人のしるしである「お歯黒」。歯へ当てるは、小粒と言う「幸運」に出くわすこと。「小粒」は一分金の異称で、金一両の四分の一に相当する。

「ほまち」は、ほまち銭の略称。「臨時の所得」や、「へそくり」などと言う。

「素灰すばいと消炭けしすみを俵へうにしてうるは、おかみさんのほまちになる」(『滑稽本』浮世風呂―四)とあるように、「ほまち」という言葉は江戸時代には普通に使われていたようだ。今はそのような言葉を耳にすることはない。どこかの地方では方言として生き続けているかもしれない。今は死語に近いと言ってよからう。

「ほまち」という言葉がいつ頃から使われなくなったかと言うことよりも、「ほまち」を漢字でどう書くかと言うことの方が興味深い。

『大辞林』(三省堂)では、「帆待ち」「外待ち」とも書く、としている。さらに、「江戸時代、運賃積み船の船頭らが運賃契約外の荷物を載せて内密の収入を得ること(以下略)」と説明している。

「ほまち」は臨時の所得の意であることに違いない。

「ほまち」を「帆待ち」「外待ち」と書く以外に、『川柳雑俳用語考』(岩波書店)では、「穂待」とあるのが目を引く。穂待は「穂持」が転じたものであり、農家の下男・下女が稲を收穫する時、落ち穂を自分の所得にすることと解説している。

「ほまち」が穂待ちであっても、臨時収入を得ることに違いはない。

先の句は婦人が一分金を臨時所得したので、それをへそくりにした、と穿って解してもよからう。

「ほまち」を詠んだ句をもう一つ。

ほまち銭下女徳兵衛に入れあげる

男と女の仲を揶揄した句に聞こえるが、女が男に入れ揚げたのではない。「徳兵衛」は男の名ではなく、徳兵衛膏薬の略称。あかぎれによく効く塗り薬である。

下女は重労働で出来た手足のあかぎれを治すため、内職か何かで貯めた「へそくり」で膏薬を買った。徳兵衛と言う男に貢いだのではない。可笑しくもあり、哀しくもある謎解きの句である。

はげた齒で女房八つ迄はなしてる

『誹風柳多留』十六篇

「はげた齒」は、お齒黒が剥げ落ちた齒。「八つ」は今の午前二時頃に当たる。

昔、庚申こうしんの日は徹夜して夜明けを待つ「庚申待ち」と言う風習があった。庚申は年に六、七回ある。

「中なかの大おとこ殿かうじんに庚申し給よひて、男をとこ、女をかた分わきて、石いしはじきシ給よフ」は『宇津保物語』の「祭あてみやの使」に見られる庚申の日の過ごし方。

貴官が住む中の大あてみや殿で、男女が左右に分かれて石弾いしはじきに興じている。大の大人達が人差し指と親指を使い、小石をはじいて遊んでいるのである。

平安時代、庚申待ちは主に宮中の遊びとして貴族の間で行われていた。室町時代には將軍

家でも行われるようになる。時代がさらに下り、江戸時代になると、庚申待ちは庶民にも浸透して年中行事となる。

江戸時代の庶民の庚申待ちの夜は、地方によっては『桃太郎』『カチカチ山』『舌切り雀』などの笑話をして過ごした。笑話には子供には聞かされない卑猥な言葉があり、子供向けに書き直されたのが『御伽草子』である。

先の句は夫から見た庚申の夜の妻の姿。早く床に入りたいと思っているのに、妻はお歯黒の落ちた歯で夜通し歓談している。夫はイライラ状態。

庚申の夜は持ちのよい嫁の髪

右は姑が見た庚申の夜の嫁の姿。乱れ髪なし。夫婦の交わりはなかったと姑は安堵する。

「庚申」は干支えとの庚申かのえさるに当たる日。神道では猿田彦さるたひこを、仏教では帝釈天たいしゃくてんと青面剛しょうめんこうを祀って徹夜する。庚申の日の夜寝ると、眠っている間に体内の三戸虫さんしちゅうが天に昇り、その人の悪事を天帝に告げ、命を奪うと言う俗説があった。

「三戸虫」は体内に棲む三匹の悪虫を言う。

庚申の日、妻はお歯黒を付けず、夜は夫婦の交わりも禁じられた。もし妊娠すると、生まれる子は盗人になると言う俗信があった。俗信とは言え、ひどいことを言ったものである。

少々、露骨だが庚申の夜を詠んだ句をもう一つ。

女房のはげた歯でねるさせぬばん

庚申の夜は、黒く光り輝く妖艶なお歯黒は禁物。

はげた歯を子に引かされて染め直し

『俳風柳多留』四十篇

子持ち女芸者の心情を穿っている。

親子の情が浮き彫りにされた句である。

「はげた歯」は、一度はお歯黒で歯を黒く染めていたが、訳あって白歯、すなわち女芸者になったことを暗に示している。その白歯を再度、黒く染め直した。

「引かされて」は「引かす」の受動的表現であり、芸者や遊女などが誰かに借金の肩代わりをしてもらい、身請けしてもらうことを言う。子の切なる願いにほだされて、誰かが母親を請けてやったのであろう。

母親は再度お歯黒を付けて堅気になり、親子の絆の証にしたのである。

昔、女芸者は、ある年齢以上に達しても、お歯黒染めすることはなかった。振袖を着て白

齒の娘風俗を堅持した。その白齒の女芸者が、先の句にあるように再び齒を黒く染めるのは、芸を捨て堅氣の世界に戻ることを意味する。

当時、芸者と言えば、唄・三味線・踊りなどの芸を座敷で披露して、客の遊興の場を盛り上げる職業を意味した。芸者の中には男芸者もあり、それと区別するため、女の芸者を女芸者と呼んだ。男芸者は太鼓持ちや、幫間ほうかんなどを言う。

吉原の芸者は廓芸者であり、文字どおり芸のみを売る。場所がら売色は禁忌であった。廓芸者以外の町芸者や深川芸者は芸だけでなく、色を売る芸者もあったと言う。

「齒を白くして新造と化ばけてより、額ひたいに小じわができ、ばゝあお仲とあだ名され、『ばゝあく』とよばれるれば、己おのがことゝて返事するも、憂うきつとめぞか」は『洒落本』の「古契三娼こけいさんしやう」にある一節。新造と言えは十六、七の見習い遊女である。お仲は深川木場の鳶職の娘で、十七歳で遊女になった。今は中年増ちゆうじしまの身であるが、訳あつて新造に化けている。

中年増と呼ばれても歳はまだ二十二、三を少し越えたくらいである。先の句と同じように、いつでも白齒を黒く染めることは出来るはず。あだ名は「ばゝあ」であっても、お仲はれっきとした独身女性である。

七所ほどて白齒は見染られ

『誹風柳多留』五十九篇

器量よしの娘は嫁ぎ先が決まっても、鉄漿水かねみずを貰かいに行つた先々で見初められると揶揄えやうしている。

お齒黒で齒を「染める」と、娘が「見初められる」を掛けて言つた洒落がある。

「鉄漿水」はお齒黒液のことである。鉄で酸化した溶液を言う。「白齒」は未婚の女性を意味するが、ここでは結婚は決まっているが、まだ入籍していない女性の意。

「七所ななころ」は初鉄漿はつかねの時に鉄漿水を貰かつてまわる家の数。「初鉄漿」は初めてお齒黒を付けることを言う。

七か所で貰つた鉄漿水は嫁入りするとき鉄漿壺に入れて持つて行く。

鉄漿水を何故、七か所で貰うのかと言う理由は定かではない。わが国には「七夕」「七草」「七五三」などと言つた、「七」の付くめでたい慣習が多い。七は縁起のよい数であることは確かである。

「七所」については、ほかに面白い句がある。

富む家もかねの無心は七な所

鉄漿水の「鉄漿」と、お金の「金」を掛けて洒落ている。裕福で金には困っていないくても、鉄漿水は貰わない訳にはいけない。鉄漿水を貰うのに貧富の差はないのだ。

ところが、貧富を利かした句がある。

飛びくに鐵漿をもらつて憎まれる

「鐵漿」に「金」を掛けて言っているのは先の句と同じである。金がないから、わが家は飛ばしたのであらうと勘ぐられたのでは、おちおち鉄漿水は貰いに行けない。

七所にまつわるこころ優しい句を一つ。

七所でほうれん草の事をいひ

七か所で鉄漿水を貰う時、どの家でも必ず「お齒黒にほうれん草は毒だから、齒を染めたあとすぐにほうれん草を食べてはいけないよ」と注意した。血を吐いて死ぬと言うのである。鉄漿水に五倍子の成分であるタンニン酸が混じると、タンニン酸第二鉄が出来る。これがお齒黒の主成分。お齒黒にほうれん草に含まれる鉄、葉酸、ビタミンCなどが作用したとしても、毒物が生成する訳がない。

こころ優しい句と言ったが、おせっかいを皮肉っているのかもしれない。

讀みと歌公家衆白齒の嫁を取り

『俳風柳多留』四十八篇

公家のかるた遊びを江戸庶民が揶揄している。

「讀みと歌」は読みかると歌がるたを言う。ここでは「歌がるた」とするのがよい。

「読みかると」は庶民に人気のあつた天正てんしやうかるたであるが、賭博色が強いことから禁制品になった。

読みかるとは、かるた四十八枚の中の赤絵札十二枚を除き、手合い四人に九枚ずつ配る。

持ち札を互いに一、二、三の順に出し、早く打ち切った者が勝ちである。

歌がるたは和歌を用いたかるたで、おもに公家や社会の上流階級の間で遊ばれた。

歌がるたには色々な種類があり、中でも小倉百人一首が基になった「百人一首かるた」が好まれた。下の句が書かれた札を撒いて置き、上の句を一人が読んで、大勢で下の句の札を競って取る。

江戸時代には小倉百人一首が習字の手本に使われたこともあり、百人一首かるたは庶民にも親しまれるようになった。江戸の町家で百人一首かるたが正月の遊びの定番になったのは、決して偶然なことではない。

先の句を単なる公家のかるた遊びと解したのでは何の可笑しみもない。お齒黒を付けた公家が、かるたに出て来る白齒の女性を、まるで我が妻をめとるかのように競って取っていると想像すると面白い。お目当ては小野小町か和泉式部、はたまた紫式部か清少納言だったのであろう。

小倉百人一首は鎌倉時代の歌人、藤原定家が京都嵯峨の小倉山荘で編集したと伝えられている。異論もあるが、天智天皇から順徳天皇の時代における百人の秀歌が一首ずつ集められていることに違いはない。

定家卿白齒の右大臣も入れ

右の句は定家の「撰集『小倉百人一首』」を揶揄している。

「右大臣」は鎌倉右大臣源実朝。実朝は歌道にも通じていたので、彼の歌は定家の撰により百人一首に納められた。

実朝は武人。公家とは違いお齒黒を付けていないのが利いている。

しら齒の殿御さとあやめうらやまれ

『誹風柳多留』十九篇

「しら齒の殿」は殿上での武人の異称。武人以外の公家はお齒黒を付けていたことによる。

白齒の殿は、ここでは源三位頼政を言う。頼政と言えば、「御さとあやめ」は当然、宮仕えしている菖蒲前あやめまえである。

「あやめ」と「うらやまれ」が韻を踏んでいるので調子がよい。

先の句は頼政と菖蒲前の人も羨む男女の仲を揶揄している。

頼政は御所に現れた怪獣・鵺ぬえを退治した。その褒美に近衛帝から賜ったのが、以前から好意を寄せていた菖蒲前だったのである。

帝は頼政が菖蒲前に関心があることは以前からご存じだった。その上で、容姿が菖蒲前によく似た二人の女房とともに同じ装束を身に纏わせ、その中から一人好きな者を選べと頼政に仰せられた。

和歌に長じた頼政はひれ伏し、恐るおそる「五月雨に池のまこもの水増して何れあやめと引きぞわづらふ」と一首奉ったと言う。帝は頼政の歌に感激され、すぐに菖蒲前を褒美にお与えになられたと伝えられている。

のつびきのならぬ名歌で官女へり

右は先の頼政の歌への帝の返し句である。

菖蒲前がいなくなったので官女が一人減り、寂しくなつたと宣われている。帝のこころの優しさが伺われる句と言つてよからう。

鶴退治で手柄を上げた頼政ではあるが、その後の人生は決して順風満帆ではなかった。平治の乱では一人だけ源氏として平清盛に付き、源氏で唯一、従三位に叙任される。その後、後白河天皇の第三皇子、以仁王を奉じて平氏討伐に挙兵するが敗れ、宇治平等院で自刃した。“埋もれ木の花咲くこともなかりしに身のなる果てぞ悲しかりける”は辞世の句。

頼政も射てから後は人頼み

鶴を矢で撃ち落とすまでは頼政の手柄。その後は、鶴を取り押さえた猪早太いのはやたが主役である。鶴退治後の頼政の人生を、鶴退治に重ねて皮肉つたのであろう。

眞白な齒でぶつり切る三の糸

『俳風柳多留』五十七篇

芸者と旦那の潔い離縁が詠まれている。

「眞白な齒」は普通、お齒黒染していない未婚女性の象徴であるが、ここでは芸者を意味する。

昔、女芸者はお齒黒を付けることなく、白齒の娘風俗を保っていた。真つ白な齒は健康的であるだけでなく、純粹で思い切りのよささえ感じさせる。

「三の糸」は三味線の絃の中で最も細い糸。三味線の糸は絹を強く撚ってこしらえているが、三の糸が一番に切れやすい。

三味線の調整法に、本調子、二上がり、三下りの三つがある。その中で三の糸の音を下げることが「三下り」と言う。三下りは「三下半」みくだりはんの略称でもある。

三下半は離縁状の異称であり、文面が三下半、すなわち「三行半」に書かれているのが特徴。そこで、この称がある。江戸時代、庶民の間で書かれる離縁状は三下半になるのが定則であった。

先の句では三の糸を切り、旦那に離縁状を突きつけた芸者の意地が詠まれている。三下りと言えば、三味線。三味線となれば芸者と言う道筋が成り立つ。

三味線の糸は撥で切れるが、三の糸を撥ではなく齒で噛み切り、離縁を表す洒落が利いている。

江戸時代の離縁は夫が妻に三下半を書くのが鉄則である。夫が離縁状を書くことで妻は持参金を返され、自由の身になった。堅気の世界の話である。

世の中には円満な離縁ばかりがある訳ではない。妻が離縁を望んでも、夫は三下半を書かないこともある。離縁状がなければ互いに再婚は許されない。夫が離縁を決断しなければ妻は掛け込み寺か縁切り寺に逃げ込み、離縁を望む強い意志を世間に示すしかなかった。

舌戦がこうじ三くだり書いている

「夫婦喧嘩は犬も食わぬ」と言う。喧嘩の原因は些細なことであつたと想像される。それでも歯止めの効かない舌戦になると、舌も筆も滑り、夫婦の縁は切れてしまう。

夫に見切りをつけたい妻は、三下半を書いてもらうだけでもありがたく思うべきかもしれない。

猪の早太歯をむき出しておどされる

『誹風柳多留』三篇

『平家物語』に出て来る「井の早太」の活躍ぶりを揶揄している。

「歯をむき出して」は、刃をむき出して事に臨んだ早太が、歯をむき出した怪獣に脅されと言う洒落。

『平家物語』に怪獣・鵄ぬえを退治する説話がある。その鵄を射止めたのは弓の名手で名高い武将・源三位頼政であつた。頼政は怪獣退治にただ一人従者を従えたが、それが頼れる家臣の猪の早太である。猪の早太は「遠江國住人」とをくみのくにのぢうにんとあるから、今の静岡県浜名湖近辺の出身だつたのであろう。

頼政は早太に保呂羽ほろばの風切りでこしらえた矢を背負わせて怪獣退治に出かけた。「保呂羽」は鳥の翼の下の部分の毛であり、中でも鷹の毛が矢羽として珍重されたと言う。

「井の早太つとより、おつるところをとておさへて、つゞけさまに九こゝろかたなぞさいたりける。其時そのとき上下てゝ手々に火をともいて、これを御らんじみ給ふに、かしらは猿さる、むくろは狸、尾はくちなは、手足は虎てあしの姿なり。なく聲鵄こゑぬえにぞにたりける」(『平家物語』一四)。

右の一節にあるように、早太は頼政が射止めた怪獣を九度にわたり刀で刺して仕留めている。獣の鳴き声は鵄に似ており、頭は猿、胴は狸、尾は蛇、そして手足は虎の姿をしていた。

猪の早太の活躍ぶりを詠んだ句は多いが、その中から、あと二つ。

猪の早太猿だくと引吊るし

仕留めた怪獣は猿のような顔をしていた。早太は得意になって鵄を引き回したのである。

猪の早太しつぽで肩にくひつつかれ

怪獣の尻尾の先は蛇の口のように裂けていた。

早太にまつわる句は武勇伝ばかりではない。人間臭いものもある。

早太には花しやうぶでも給はらず

鶴退治では頼政が主役。早太は脇役である。頼政は怪獣退治の褒美として、近衛帝から菖蒲前^{めまえ}を賜った。早太は帝から花菖蒲さえもらえなかったと皮肉っている。

川柳では影の功労者でもたたえることはない。

花よめは齒にきぬきせて笑ふ也

『俳風柳多留』二十六篇

「花よめ」は「花嫁」。嫁になる女性の美称である。結婚したばかりの女性も花嫁と言う。「齒にきぬきせて」は齒に衣着せぬ^{きぬ}をもじって言った洒落。「齒に衣着せぬ」は、思ったことを遠慮会釈もなく、ズケズケ言うことの譬えとして用いられる。齒に衣着せては、その反対の意であり、思ったことを露骨に言うのではなく、言葉をオブラートで包んだような言い方すること。

先の句にある花嫁は一見穏やかな印象を与えるが、「笑ふ」はだだの笑いではなさそうだ。「齒にきぬきせて」は白い齒を見せない笑いを暗示しており、笑いは含み笑いかもしれない。花嫁が笑う相手は当然、姑である。

嫁と姑の仲は話題に事欠かない。言葉の世界でも面白おかしく取り上げられることが多い。

「嫁の三日ぼめと世上で姑をそしれども、三日なりともほめ給うは、ありがたいといふ心」(『滑稽本』当世阿多福飯面)。

右の一節は「嫁の三日誉め^{みっか}」と言うことわざを引き、姑の嫁に対する絶対的優位を説いている。三日でも姑が嫁をほめるのは殊勝なことだと言うから始末が悪い。

嫁の三日誉めは、どんなに意地悪な姑でも、花嫁が来て間もないあいだは悪口を言ったり、いびつたりしないものだと言う。嫁が来た当座は珍しさもあり、姑は嫁をほめるが、それもほんの短い間だけであり、長続きしないと言うから困ったものである。

先の句は嫁の姑に対する闘争心を穿ったものと言つてよからう。三日しか嫁をほめない姑より、嫁のほう一枚も二枚も上かもしれない。

「嫁が姑になる」と言うことわざがある。いずれ嫁は姑になるのである。嫁の三日誉めであろうが、何であらうが、嫁は白い齒を見せて、ただひたすらに姑になる日を待てばよい。

齒に衣着せて本音を吐かないのが賢女と言うものであろう。

焼飯に天草勢の齒は立ず

『誹風柳多留』五十四篇

島原の乱で天草軍が北條氏綱の攻撃に屈したのを揶揄している。勝つはずがないと思つたのである。

「焼飯」と「齒」は縁語であるのが利いている。焼飯は北條氏の俗称。紋所が焼飯、すなわち「握り飯」に似ていたのでこの称がある。

島原の乱は寛永十四年（一六三七）、肥前島原と肥後天草で起きた農民一揆を言う。島原の城主、松倉重次の暴政と、幕府のキリシタン弾圧に対する益田四郎時貞（天草四郎）率いる農民軍の乱である。

天草四郎を首領とした農民軍は原城に立て籠り幕府軍と果敢に戦つたが皆殺しに合う。原城は翌十五年に陥落。弱者は強者に齒が立たなかつたのである。

先の句を、握り飯であれば天草軍の齒は立つのに、北條氏の紋所の焼飯には齒が立たなかつたとするのは素直な解釈。事実、天草軍は北條氏の兵糧攻めに合い、全員が命を落とす。

齒は食の縁語であるが、もうひとひねりして、齒を「覇」^はあるいは「派」^はに読み替えると面白い。覇は「旗頭」を意味し、一派を率いる者を言う。派は「一旗揚げる」に通じる。

いずれにしても、農民軍を率いる天草四郎は焼飯に旗を立てることが出来なかつた。焼飯と言う旗印にかなわなかつたのである。

勝ち目がないことを「齒が立たない」と言う。もともと固い物に齒の力が物理的に及ばないことを意味した。固くては齒型も付かない。無理して噛むと齒が折れる。手ならぬ、齒に負えないのである。

何事も齒が立つか、立たないか噛み分けて事に臨む手もある。負けるかもしれない思つていても、自力を信じて強者に立ち向かう弱者もある。天草軍はいかなる信条で戦に臨んだのであろうか。

いゝ娘はだか承知で齒がたゝず

『誹風柳多留』四十一篇

「はだか」はいわゆる「裸嫁」の略称。裸なら齒が立つが、裸嫁では齒が立たないと言って洒落ている。

裸嫁は、嫁入り支度をすべて先方が整えて迎え入れてくれる幸運な花嫁を言う。一般に器量がよくて、貧しい家の出の者が多い。

裸同然の娘が財産のある家に嫁げば玉の輿に乗ったことになる。訳あって持参金を携え、下女まで従えて行く花嫁とは天と地ほど違う。

江戸川柳に詠まれる「娘」と言えば、小野小町、小式部内侍、『仮名手本忠臣蔵』のお軽、そして踊り子くらいである。ここでは、そのような花のある娘ではなく、質素でいじらしい子を言う。

先の句は、嫁入り道具なしで娘を迎え入れることの出来ない哀れな男を揶揄している。金さえあれば好きな娘を裸同然でめとることが出来るのにと、切齒して悔しがっているに違いない。

裸の称は花嫁に限ってあるのではない。男にも「裸の花婿百貫^{はなむこひゃっかん}」という言葉がある。一銭の錢も持たない身一つでも、男は百貫文の値打ちがあると言うのである。

男たる者、肝に銘じるべし。

「此身の娣^{いもふと}と言からには、親類や出店^{でみせ}の奴が何の角^かのと咄しても、齒は立たせねへ覚悟でさせる嫁入りだが」は、『人情本』の「春告鳥^{はるつげどり}」にある一節。

「齒は立せねへ」の用法が面白い。「文句は言わせない」の意であり、無理やり結婚させると言うのである。

「齒が立たない」と言う表現はよく用いられるが、どちらかと言えば消極的な印象が強い。齒が折れては大変だと言う心理が働き、防御的であるかのように思われる。

先に引いた一節にあるように、「齒は立せねへ」と言えば江戸っ子らしくて生きがいい。かなわないことをかなえると言うのだから積極的である。攻撃的であると言ってもよいかもしれない。

結婚にはいろいろと事情があるものだ。

少々品位に欠けるが、裸嫁を詠んだ句をもう一つ。

裸でといへば娘はをかしがり

裸を真に受けた生娘が顔を赤くして恥じらっている。「裸」は裸嫁の意。現実離れた可笑しみが川柳の味と言ってよからう。

三つぶとんやはらかにして齒はたゝず

『誹風柳多留』四十篇

「三つぶとん」は「三蒲団」^{みつぶとん}。高価な蒲団なので、遊女に買い与えることの出来ない哀れな男を皮肉っている。

柔らかいのに歯が立たないと言った、理屈に合わない言い回しが面白い。

「三蒲団」は敷蒲団を三枚重ねたものを言う。江戸時代、遊廓で花魁^{おいらん}が大尽^{だいじん}に贈られた夜具。贈られたと言うよりも、おねだりして得たと言ったほうが正しいかもしれない。

三蒲団は縮緬^{ちりめん}や緞子^{どんす}などでこしらえた豪華な蒲団。別名を「飾夜具」とも言い、五節句やそのほか遊客が群集するとき積夜具として客に披露した。廓の繁盛ぶりを誇示したのである。

五節句は一年を通して大事な節句であり、一月七日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日の五日を言う。

「花魁」は遊女の中でも格付けの高い女郎。江戸初期には「太夫^{たゆう}」と呼ばれた。花魁と言え、^{おいらんどうちゆう}「花魁道中」の主役である。新造や禿^{かぶつ}などを従えて廓から引手茶屋まで遊客を迎えに行くのが花であった。

「大尽」は同時代の大金持ちで、色道を好む者。「大臣^{だいじん}」とも言うが、大物であることに違いはない。

「國左エ門は三ツ蒲団^{ぶとん}のうへまでは漕ぎ^こつけたが、勤め^{つと}の金なきゆへ、情なく^{なさけ}つき出され」(『黄表紙』見徳一炊夢)。

右の一節は三蒲団を遊女に贈ったものの、その後の遊興費の工面が付かず、遊女に愛想づかしされた哀れな男、國左エ門の話。

一般社会では義理と人情で結ばれた上下関係が大事にされる。男の享樂の里、遊里では、地位、階級、権力などは全く通用しない。唯一幅を利かすのは粹と情熱と金力だけ。

遊里の世界で最も羽振りがよかったのは、武士ではなく町人であった。士農工商の序列など何の役にも立たない。

先の一節にある國左エ門のような遊客を嘲笑した句を一つ。

三蒲團上りつめるとすべり落ち

粹な遊客を勤め上げるには、田地田畑、家屋敷も手放すくらいの覚悟がいった。享樂の場では大尽であっても、一夜にして身代を潰すことがあったのである。女に入れ揚げ、高く積まれた三蒲団の安定は悪く、滑りやすいのも皮肉なものである。

めがたきと思へど島田齒がたゝず

『誹風柳多留』六篇

遊女を巡つての男の争いを揶揄している。

「めがたき」は「女敵」であるが、妻と密通した男のことを言っているのではない。それでは相手は誰なのか。少し推理が必要のようだ。

「島田」と言えば未婚女性の髪型「島田髷しまだまげ」を想像するが、ここではそうではない。男の名前「島田重三郎」の略称である。島田は遊女高尾の情夫で女敵になる男。

〈島田めは錢にならぬと遣手いひ〉と言う句があることから、重三郎は美男子できやしやな男だったのであろう。

「高尾」は仙台高尾。高尾は江戸新吉原の三浦屋四郎左衛門のお抱え遊女である。

三浦屋には高尾と言う名の遊女が初代から十一代まであった。それらを区別するため落籍者や逸話にちなんで、「仙台高尾」「榊原高尾」「紺屋高尾」「子持高尾」などと呼んだ。仙台高尾は初代の高尾であるとも、二代目の高尾であつたとも伝えられているが、真偽の程は定かではない。

誰が仙台高尾を巡つて島田と争つたかと言えば、「仙台」と言う冠が示すように、仙台侯伊達綱宗だったのである。綱宗は伊達政宗の孫に当たり、名家の出ではあるが放蕩者で、よく遊里に足を踏み入れた。そのとき出会つたのが高尾である。

綱宗は高尾をこよなく愛し、落籍までしたが、高尾には島田と言う意中の男があつたため、頑としてここを開くことはなかった。綱宗は高尾のかたくなな態度が気に入らず、隅田川の三股辺りで高尾を舟中吊るし斬りにしたと語り継がれている。

三つまたで玉のこしからこぼれ落ち

右の句は三股で命を落とした仙台高尾を嘲笑している。江戸川柳では人の命を深刻に考えないのがいのち。

冒頭の句では「島田髷」に「櫛の齒」を利かせている。島田髷を「島田」に見立て、櫛の齒を「綱宗の齒」になぞらえて洒落ている。綱宗は女敵、島田重三郎と高尾の固い絆を噛み切ることが出来なかった。

伊達綱宗にまつわる句をもう一つ。

伊達ぎらい吉原中に只一人

吉原で綱宗を嫌うのは三浦屋の仙台高尾ただ一人だと皮肉っている。弱者であっても同情しないのが川柳の真骨頂。

お妾へ齒がたつものは櫛ばかり

『誹風柳多留』四十五篇

正妻であつても妾めかけには齒が立たないと擲擧している。

妾は正式な妻ではないが、男と妻と同一ような関係を持ち、生活が保障されている女性を言う。

戦国時代の武家では一夫多妻制が堂々とまかり通っていた。正妻に子が生まれなければ誰に憚ることなく側室を持った。「側室」は妾の品のいい呼称。

徳川將軍を例に引くと、初代の家康をはじめ歴代の將軍は皆、正室（御台所）の他に側室を持った。側室は普通、將軍や御台所の世話をする中臈ちゆうろうがなつた。中臈は公家や武家など良家の出身者が多く、育ちや器量のよいものが多い。

町人が妾を囲う時は、武家のように跡取りをこしらえと言うよりも、むしろ女房以外の女性と肉体関係を持つのが狙いだった。

先の句では、「齒がたつものは櫛ばかり」と言つた表現に工夫がある。妾には齒が立たないとかからさまに言うのではなく、齒が立つのは櫛だけ、と言うだけで十分である。言っているのは当然のことながら正妻。

櫛の齒であれば力ずくでも妾の髪に立てることは出来るが、器量や氣立てとなると、どうしても齒が立たない。そう思っていると解してよからう。

大店の旦那のように金持ちで社会的にも信用があり、妾を持つのも許されるような立場であれば、正妻の中には妾と仲よく出来る者もあつたようだ。それは稀有なことであり、多くは妾に敵意を抱くのが普通である。

「きよねんの春はる、中州なかずであつた地獄ぢごくではねへかしらん。小便組しやうべんぐみなどといふところは、ごめんだよ」『黄表紙』江戸生艶氣樺焼。

右の一節は、妾が支度金詐欺をする小便組のことを言っている。小便組は旦那に大金を貰つて妾になり、奉公した後わざと寝小便をして嫌がらせをする。旦那に愛想尽かしされるのを待つのである。契約が破棄されて帰る時、旦那に無心して着物などを貰うのが狙いだった。金や物で決着がつく妾であれば、正妻は櫛の齒さえ立てる必要はなかつたのであろう。

おもだか一と葉神農も齒が立ず

『誹風柳多留』三十七篇

「おもだか」は「沢瀉」と書く。

沢瀉はオモダカ科の多年草。水田や沼畔などに自生し、葉は鋸^{やじり}の形をしているのが特徴。葉面の脈が高く隆起していることから、「面高^{おもたか}」とも書く。

「神農^{しんのう}」は古代中国の伝説上の帝王、神農氏を言う。神農を「炎帝」とも称するが、その名の由来は火徳をもって王になったことによる。

神農は農具を発明し、五穀を蒔き、人民に農業を教えた。神農は農業を普及させただけではなく、『史記』に「楮^{しゅ}鞭^{べん}を以て草木を打ち、百草を嘗^なめて醫藥を知る」とあるように、赤い鞭で草木を打ち、百草をなめて薬草を見分け、医薬の道を切り開いた。

先の句では、草を嘗めることにかけては百戦錬磨の神農であっても、こと沢瀉の葉となると固くて歯が立つまいと揶揄している。

沢瀉の葉は固くて鋸の形をしている。加えて、沢瀉が「沢瀉^{おもだか}緘^{おどし}」を連想させることから、歯が立たないと言っているのかもしれない。

沢瀉^{おもだか}緘^{おどし}は鎧の緘の一つをなし、緘は鎧の札^{さね}を紐か革で綴り合せてこしらえる。緘は色彩豊かであり、その美を競うこともあったと言う。

先の句には沢瀉の葉一枚を鎧の緘一つに見立てた洒落がある。「葉」と「歯」が韻を踏んでいるので調子もよい。

神農はいろんな野草を食べて薬草を探し当てた。沢瀉の塊茎は食用にした。葉は薬になるかどうか噛んで確かめたのであろう。時には尖った葉で舌を傷つけたかもしれない。

神農の体を張った仕事を詠んだ句を二つ。

神農は鋸草で舌を切り

鋸の歯のように尖った葉を嘗めたので舌を切った。これでは舌が何枚あっても足りない。

神農は腹結したり下したり

百草を食すると、ある時は便秘をしたり、下痢もする。

「腹結」は昔の医学用語で便秘の意。腹を下せば専門的には、「瀉^{しゃ}する」と言った。

魚篇に堅くて初ては歯がたゝず

『誹風柳多留』五十九篇

「魚」偏に「堅」と書いて、「鯉」と言う漢字が出来上がる。謎解きの句と言ってよかる

う。

初物の鰐、「初鰐」は高価なので、庶民には手が出ないだろうと嘲っている。

「堅くて」歯が立たないが、「高くて」買えないを想像させる音韻があり面白い。

初鰐は生きているのが命。そのため値が張った。

初鰐は夏の走りに捕れるものを言う。それも一刻も早く江戸に着いた物でなくてはならない。江戸っ子はその高価な初鰐を財布をはたいてでも買う。人に遅れじと競って求めるところに江戸っ子の心意気があった。

当時、江戸では各地で捕れた鰐が多く出回っていた。中でも鎌倉を経て馬か船で搬入した鰐が一番新鮮だったと言う。初鰐が高い訳は、その流通経路にあった。

鎌倉を生きて出でけん初鰐

右は芭蕉の句。

鎌倉から出荷される初鰐は、どこのものより生きがよかった。

「よしなせへ。所詮おめへたちに歯は立ねへ」「何で立んぞい。乾魚なら首から骨までむりむりと咬くだいて見しよ。其様な役たゝん歯ぢやないはい」「ナニサ錢づくの事さ」「なんぼ強ても錢は咬んはい」『滑稽本』浮世風呂―四）。

右の一節は商人とけち兵衛の鰐珍問答。「歯は立ねへ」の勝手な解釈で話が咬み合わないのが面白い。

長屋住まいの江戸っ子にとって、初鰐は目が飛び出るほど高くて手の出ない魚であったと想像される。

一方、天明の頃、江戸日本橋石町に住んでいた富豪、富林治右衛門は、一匹二兩三分もする初鰐を買い求め、客人に馳走したと言ひ伝えられている。かけそば一杯が十六文であった当時のことを考えると、庶民にとっての二兩三分はいかに大金であったかは推して知るべし。

初鰐の高価ぶりを詠んだ句をもう一つ。

初鰐菓のやうにもりさばき

菓を盛るように初鰐を少しづつ慎重に分配している。量の違いは許されない。手が震えていたかもしれない。

「もりさばき」の「さばき」が真剣な所作を表しており、滑稽である。

和らかな國でも犬の歯はたゝず

『俳風柳多留』四十三篇

柔らかいのには歯が立たないと言った、理屈に合わない言い回しが面白い。

「和らかな國」は古のわが国の名称。『大辞林』（三省堂）によると、「もと『倭』と書いたが、天明天皇の時、『倭』に通じる『和』を用いることが定められた」とある。

「犬」は三韓王の異称。「三韓」は古代朝鮮の三国をなす百濟、新羅、高句麗の総称である。犬の称は神功皇后が三韓を征伐して凱旋の折り、「三韓は日本の犬なり」と岩上に弓でお書きになられたと言う故事による。

「犬の字を和ように書いて點を打ち」はその例句。

先の句では、穏やかな名の大和の国であっても、犬の歯では歯は立つまいと揶揄している。犬は当然のことながら三韓王の譬えである。

「土段場へ直したうなぎの様に、びくしやくしても歯はたゝねへぜ」（『人情本』春色梅児譽美―後）は「歯は立たない」の用例。

まな板の上のうなぎのように、じたばたしても手向かい出来ないと言っている。

自分の力が及ぶことを「歯が立つ」と言う。「噛むことが出来る」が転じて出来た成句である。相手の力に対して十分に對抗出来ることを言う。

「歯が立つ」は、先に引いた一節に「歯はたゝねへぜ」とあるように、打消しを伴う場合が多い。「歯が立たない」がそれであり、相手が強くて勝ち目のない時の譬えになる。

冒頭の句では、大和に犬の歯は立たなかったと言う。その犬の歯をさらにへし折ろうとする句の一つ。

我が朝の猿三韓の犬を攻め

神功皇后は、三韓は日本の犬なりと申された。その後、猿面顔の秀吉も、文禄・慶長の役で朝鮮出兵を企てるが戦果は上がらなかった。

「猿」と「犬」は犬猿の仲であるのが利いている。

歯ぎしりのやうに枕のしまる音

（『誹風柳多留』六篇）

昔、枕には木枕、括り枕、箱枕などがあつた。木枕は上流の武家の閨房、括り枕は一般に町家、そして箱枕は妾宅や遊里の閨房で使われることが多かった。「閨房」は、ねやの意。木枕は木でこしらえた箱のような枕。木枕の上部には布製の小枕が付いていて、中に靱殻などが入っている。

木枕の上の小枕に紙を敷いて紐で締め付ける時、先の句にある歯ぎしりのような音がする。歯ぎしりに限らず、キリキリと言う音は厭なものである。

歯ぎしりは睡眠中に上下の歯が強く擦り合う習癖を言う。原因は咀嚼筋が何らかの理由で緊張することによる。歯ぎしりはキリキリと音を立てるだけでなく、歯が磨り減るから厄介だ。

先の句にあるように、歯ぎしりのような厭な音は人間だけが発するのではない。無生物にもある。人間の歯ぎしりは生理的に生じるが、木枕の手入れの時の歯ぎしりに似た音は物理的に起きる。

人の歯ぎしりに似た音を詠んだ句をもう一つ。

歩くたび歯ぎしりをする安い下駄

下駄は木製の履物。下面に歯がある。歯は二枚あり、台の下的一面をくり抜いてこしらえたものと、高下駄のように台の下に歯を嵌め込んだものがある。くり抜いた歯は磨り減るだけだが、嵌め込んだ歯は古くなると緩み、歩くたびにキリキリと言う厭な音を立てる。

人間は不平がもとで昼間でも歯ぎしりする。古くなった下駄の歯は、ゆるみが元で歯ぎしりするが、何か他に不満はないのだろうか。

歯ぎしりする下駄の歯入れを穿った句を一つ。

雪や雨下駄の歯入れは待っている

歯ぎしりする下駄の歯はゆるくなっている。道がぬかると歯が抜ける。雪や雨の日は下駄の歯入れにとって絶好の稼ぎ時となる訳だ。

桶屋とまではいなくても、歯入れも悪天候をありがたく思ったに違いない。

木枕の歯ぎしりは枕の手入れをする時の音。それでは小枕を締め付けた紐がゆるむと果たしてどのような音がするのであろうか。

子守歌に聞こえるとよいのだが。

くどかれて前歯できせるかんで居る

『誹風柳多留』十二篇

遊女が客にくどかれて前歯で煙管きせるを噛んでいる。女の思わせぶりを揶揄したのである。奥歯で噛んだのでは艶消し。

「煙管」は刻み煙草を吸う道具。

「傾城^{けいせい}の昼寝^ねぬ程に思ひつめ、問れぬつらさ待わびて、無理に合せた畳算^{たたみざん}、ぢれて迷ふて、昏惚^{まよふて}ちれて、憤発^{ぢれて}煙管に齒の跡が、夜明の星のふたつみつよつ」『人情本』春告鳥―四。

右の一節では花魁^{おいらん}が煙管を噛み、情人を恋しく思う情景が綴られている。

「畳算」は、かんざしを畳の上に放り投げ、落ちた所から畳の目を縁まで数える遊び。数の丁（偶数）、半（奇数）で、吉凶や待ち人などについて占った。

「夜明けの星」は煙管の吸い口の金属に付いた齒形をキラキラ光る星に譬えている。

昔、江戸には多くの遊里があつた。官許のものは吉原だけであり、それ以外は「岡場所」と呼ばれた。岡場所は品川、深川、新宿にあつた。江戸の遊里を東西南北に分けると、東は深川、西は新宿、南は品川、北は吉原となり、うまく分布している。

江戸、吉原の公娼街の遊女には格付けがあり、高位の遊女を傾城^{けいせい}と言った。位の高い遊女は特に花魁^{かぎ}と言う。花魁は禿^{かぶろ}や妹女郎が姉女郎を呼ぶ時に用いた称であり、それが後に高位の遊女の総称となった。

吉原で高位の遊女と廓遊びする場合、登楼したあと、初会、二会目、三会目と言った段階を踏まなければ馴染みになることが出来ない。三回目でやっと床入りとなる。そのとき祝儀に当たる床花^{とこばな}を遊女の枕元にあるタバコ盆に置くと言う慣習があつた。

初会や二会目で気を許さなかつた遊女も、三回目の馴染になると、さすがにこころを開いた。

遊女がこころを許しても、遊客はいつ迄も入れ揚げの訳には行かない。足が遠のくこともある。

傾ひなんした顔さと焼ぎせる

遊客はしばらく顔を見せなかつたのは病気のせいだと言ひ訳をする。遊女は信じない。元氣そうな顔に見える。嘘をついているのが憎い。これでは焼煙管を押し付けられても仕方がない。

焼煙管は雁首を火にあぶつたものを言う。おどしに用いるが、つねるのと同じくらいの戯れであり、遊女の接客術の一つ。

煙管にはいろいろな痕跡が残る。

論に齒が立たず經文喰やぶり

『誹風柳多留』三十六篇

論議に負けて痛癢を起している。

「論」は論語の略称。仏教では問答により教義を説き明かすことを言う。「經文」は仏教の經典に書かれている文章。

『仮名草子』の「犬枕」に「詰る物」の一つとして、「無學論議」が挙げられている。詰る物とは、論の道筋が通っており、決着が着くことを言う。無學論議は仏教で經文の要義を問答議論することとしている。

「無學」は小乗仏教で最高位に達した修行者のことを言う。凡人にはほど遠い境地である。江戸時代の宗教と言えば、幕府は豊臣政権の宗教政策を受けて、寺社の権威を完全に弱体化した。寺社奉行を置いて監視し、寺院を封建支配の末端機関として利用したことが寺社弱体化を象徴している。

豊臣政権は新しい教義を唱えることを禁止した。キリシタンの普及を取り締まり、強制的に仏教への転宗を命じた。檀家制度のもと庶民は必ず檀那寺に属さなければならない。寺院は毎年、檀家の家族を詳細に記録した宗門人別帳を寺社奉行に提出する義務があった。

仏教は完全に民衆支配のために利用されるに至った。庶民は幕府にも論にも齒が立たず、先の句のような風刺が生まれたものと想像される。

「比丘のいわく、『なふ死ぬるく』と聲をたてられたれば、坊主も『そなたの御死にあれば、おれも死ぬるよなふ』と、ろんぎに聲をたつる」(『江戸笑話』きのふはけふの物語―上)。

右は比丘尼と坊主の交わりを描写した一節。「比丘尼」は尼姿の売女の称。

「死ぬる」は本当の死を意味するものではない。絶頂感を「死ぬるく」と問答して、わざと仏語を用いて「ろんぎ(論議)」と言った。

江戸庶民はこのような論議であれば膝を乗り出して教義に耳を傾けたかもしれない。

(論に負けても実に勝て)と言うことわざがある。庶民は論にも、実にも、封建社会にも負けたのである。

やはらかな嫁菜姑の御齒に合ひ

(『俳風柳多留』三十三篇)

仲のよい嫁と姑を皮肉っている。

「嫁菜」はキク科の多年草。葉は披針形で笹の葉のように平たくて細長い。秋になると枝葉に淡青紫色の頭状花を付ける。春の若葉は古くから食材として利用された。

嫁菜は摘み草の一つであるが、「嫁」の比喻として用いられる。嫁菜の称の由来は不明。

「御齒に合ひ」は、春に摘んだ柔らかい嫁菜が姑の齒に合うことと、嫁の穏やかな性格が

姑の性に合うことを重ねて言った洒落。

嫁と姑の仲は常に平穩でなごやかな関係ばかりではない。両者の平和な関係はいつ失われても不思議ではない。二人の均衡がとれているとすれば、それは嫁か姑のどちらかが我慢している。

姑はむやみに嫁の下手に出るのではない。嫁の上手に行く賢い姑もある。

次の句がそのことを物語っている。

嫁のかうかう噛みわけるといふ姑

嫁の漬けた香の物をほめることの出来る姑はよい姑。

「かうかう」は香の物の「香々」と、親孝行の「孝行」を掛けて言った洒落。

「噛みわけるといふ、香の物の味を吟味することと、親孝行の中身を確かめることを重ねて言った工夫がある。「香々」と「噛みわけるといふ」が縁語であるのも利いている。

姑を制するのは、やはり柔らかな嫁であることを詠んだ句をもう一つ。

やはらかな嫁は姑の齒がたゝず

嫁はふくよかな体つきと、穏やかな性格を持ち合わせている。姑にとって申し分のない嫁であらう。

嫁と姑とはかく仲の悪いものだと思われがちだが、穏やかな人柄の嫁は姑に文句を言わせない。多少の失敗があっても、姑は目をつぶる。

賢い嫁は研ぎ澄ました牙を隠す。姑の牙が朽ちるのをじっと待っているのかもしれない。裏にはうらが有り怖い。

垢なめの齒にはさまった灸のふた

『誹風柳多留』四十六篇

湯女の滑稽な表情を詠んでいる。

「垢なめ」は温泉や湯屋などで男の髪を洗ったり、体の垢を落としたりする湯女の別称。

「なめ」は「嘗め」。舌の先で物を嘗める意であるが、ここでは舌で体を嘗めているのではない。体に息を吹きかけ布で垢を掻き落としている。その姿があたかも体を嘗めているように見えた。

『枕草子』の「都風俗鑑」に、「女の異名を猿といふ事は、諸人の垢を掻く故なりとかや」とあるように、垢を掻き落とす動作が猿の仕草に似ていた。湯女を猿と呼んだゆえんである。「灸のふた」は「灸の蓋」。灸をすえた後、紙に膏藥を延ばして貼るが、その紙を「蓋」

と言った。

先の句では、湯女が浴客の体に息を吹きかけて熱心に垢を落としている。その時、剥げかけた灸の蓋が前歯に挟まった。蓋が長い舌に見える。湯女の顔が可笑しくもあり、怖くもあった。

江戸中期には私娼の湯女を置いた湯屋が江戸中に二百軒もあったと言う。

湯女の表向きの仕事は客の背中の中を掻き落とすこと。これも七つ（午後四時頃）になると終わる。そのあと湯女は着飾り、脱衣場には金屏風をめぐらし、歌舞音曲で浴客を楽しませた。湯女は芸を披露するだけでなく、客の求めがあれば湯屋の二階で春も売った。

湯女の芸は半端ではない。吉原の遊女が身に付けていた諸芸能を習い覚えていた。湯屋が繁盛し、その影響を受けて吉原は衰退したと言われている。

湯女のいる湯屋は人気がある反面、風紀も乱れていた。幕府は度々取り締まるが効き目がない。明暦三年（一六五七）になり、ようやく湯屋に湯女を置くことを禁止した。

湯女のいる温泉を風刺した句の一つ。

ふんどしを猿に取られる草津の湯

浴客の褌を野生の猿が取ったのではない。湯女が剥ぎ取った。「猿」と湯女の「猿」を掛けて洒落ている。

昔は草津温泉にも湯女がいて、男を無褌にして春を売ったのであろう。

歯にあたる肴を貰う三會目

『誹風柳多留』五十三篇

廓で悲願達成した遊客を揶揄している。

「齒にあたる」は歯に噛み当てる意。幸運に出くわすことの譬えである。

「肴」^{さかな}は酒の酒菜。昔は祝儀の金を肴に混ぜて箸に挟んで与えたと言う。その金を遊女が噛み当てたと解することも出来るが、お目当ての遊女を肴になぞらえて、遊客が幸運を得たと解釈することも出来るよう。

「三會目」は客の廓での三回目なの遊興の日。

三會目を「馴染み」と言うが、この日に至るまでには遊客は何度も遊里に通わなければならない。お金もうんと使ったはずである。

一度目の遊びを「初会」と言う。初会では遊女は客を全く受け入れず、無視同然。冷たくあしらう。酒宴の後の床入りも形だけ。色いろとは一切なし。

客が遊女に二度目に会うことを「二会目」、あるいは「裏^{うら}」と言った。遊女は初会の時よりも親しく接するが、それでも遊客が満足する程のものではない。

三会目の馴染になると、客と遊女との隔たりはなくなる。遊女も宴席での台の物に手を付けるようになる。

三会目は廓でいろいろな作法があり、遊客も遊女も忙しい。遊女は客専用の箸を用意し、大切にして預かっておく。箸紙には客の定紋を入れるが、そのほかあだなを書くなどして、かりそめの夫気分を味合わせる。

遊客は三会目にして初めて床入りを果たす。

三会目では、客は遊女に「床花^{とけな}」と言う祝儀を贈らなければならない。寢床の中で与える花と言うことで床花の称がある。床花は実際には遊女の枕元にある煙草盆の上に置いたよううだ。

祝儀と言えば、廓での慣習に従い遣手にも金一分を渡さなければならない。遣手は遊客と遊女の仲を取り持つ大切な立場にある。遣手の機嫌を損ねると、せつかくの佳境入りが台無しになる。

悲願の三会目を詠んだ句をもう一つ。

國府より手ざわりのいい三会目

「國府」は薩摩座の上質の刻み煙草。

吉原の遊客は國府を愛用するのを粹でお洒落と考えた。臭ってよし、触ってよしの、何とも言えない感触の煙草であった。

その國府も、遊女の匂いと手触りにはかなわなかったのである。

根ごとぬく紅葉車の齒止めにし

『誹風柳多留』三十二篇

単純な句のようだが、実は理屈っぽい。

「根ごとぬく」は、草木を根こそぎ引き抜くのではない。「根引き」の意。

根引きは遊女や芸者を落籍することを言う。身請けするのである。

「紅葉」は遊女・高尾の異称。京都郊外にある紅葉で名高い高雄山神護寺を「高尾」になぞらえた。

「車」は源氏車。源氏車は榊原家の紋章である。紅葉と車の縁から、「紅葉車」は榊原家とかかわりのある高尾、すなわち「榊原高尾」となる。

先の句を、紅葉を根ごと抜き、紅葉見物の車の歯止めにしたと解するのは無粋。「歯止め」は車の滑りを物理的に止めたのではない。榊原家を「源氏車」に譬え、その危機を誰かが食い止めたのである。

家老職紅葉をぬいて車留

誰が榊原家を救ったかと言えば、右の句にあるように、榊原家留守居役の家老・尾崎富右衛門だった。

尾崎は、主君の榊原政岑が昼夜を問わず吉原に通い馴染みになった高尾を落籍して、下谷池之端の中屋敷に囲った。このことが幕府に知れ、政岑は謹慎の命を受けるが、家老職の尾崎が主君と高尾の関係を言葉巧みに弁明して、榊原家の安泰を保つ。

江戸吉原の三浦屋には高尾と言う名の遊女が歴代十一人あったと言う。二代目の高尾は伊達綱宗に船中吊るし斬りに合い、不運な死を遂げた仙台高尾である。

政岑が馴染んだ高尾は「榊原高尾」と称され、六代目の高尾であったと伝えられている。

川柳に「二本目の紅葉車に引かれてく」とあるように、江戸川柳では榊原高尾は二代目の高尾とされているようだ。

いずれにしても、仙台高尾と榊原高尾以外の九人の高尾には歴史に残るような逸話はない。そのためか川柳にそれらの名前は出て来ない。

幸運な高尾を詠んだ句をもう一つ。

運のよい高尾は車留になり

運のよい高尾は榊原高尾。運の悪い高尾は仙台高尾である。

「車」は榊原家の家紋。

歯をかんで十月待つてゐる國家老

『誹風柳多留』五十一篇

「歯をかんで」は「歯を噛んで」。悔しさや怒り、または苦痛などに堪えるさまを言う。

「十月」は長い歳月の比喩的表現。胎児が母親のおなかに宿る「十月十日」に倣っているのである。

先の句は主君の留守に代わり、領国を守る律儀な國家老の奮闘ぶりを詠んでいる。歯を食いしぼり、諸事に堪える姿は同情に値する。笑いごとでは済まされない。

「國家老」は江戸時代、諸大名の領国で、主君の江戸在勤中に留守を預かった国詰めの家老。江戸詰め、江戸家老と区別するための称である。

江戸家老は世故に長じていたが、國家老は頑固で融通が利かない。堅物とも取れる堅実な生き方は、ある意味で滑稽に見えた。國家老が川柳の絶好の題材になつても不思議ではない。ましろくに城をしてゆく國家老

主君が参勤交代で江戸に出かけている間、國家老は留守番をしなければならない。参勤交代では道中の経費が掛かり、藩の財政に重くのしかかる。國家老の悩みは諸事に尽きなかった。

右の句にあるように、國家老は主君の江戸勤めの間は眞陸ましろくに城を守らなければならない。「眞陸」は十分であることの意。

悔しさや苦しさに堪え忍ぶとき歯噛みする。前歯で噛むか、奥歯で噛むかにより、湧き出る感情の色合いは違う。

前歯で噛むことを「切歯する」と言う。悔しさを表す表情である。奥歯で噛むと言えば、「歯を食いしばる」を連想する。苦しさに堪えている姿に他ならない。

「牙きはを噛んで日を送る」と言うことわざがある。

ネズミが洪水に合い、水から命を守るため樹に登り、飢えと寒さに堪えながら、水の引くのを待つことの譬え。

苦難や苦痛に堪え忍び、歯を食いしばるのは人間だけの業ではない。動物も牙を使い、人間に負けない感情表現をする。

歯ぎしりに神馬喰料かはかされ

『誹風柳多留』五十三篇

「歯ぎしり」は睡眠中に歯を擦り合わせたり、食いしばったりする習癖。歯がキリキリと言う厭な音を立てるから厄介だ。歯が磨り減るのも困ったものである。

「神馬しんめ」は神霊の乗り物として神社に奉納された馬。白馬が多い。

「喰料」は飼料。俗信に、「神馬しんめの食べた豆を食べると歯ぎしりが治る」という言い伝えがある。神馬の飼料は大豆であらう。

「かはかされ」は「乾かされ」。人に物をただで使われたり、見られたり、聞かれたりすることを言う。「干上がる」と同じ意。要するに損をすることである。

先の句では、歯ぎしりを治すために参拝者が神馬の飼料を失敬した。馬の食べる豆が無くなり、かわいそうだと小心者が心配している。

その昔、神馬の食べた大豆を煎じて飲むと歯ぎしりが治ると言われていた。子供の夜泣き

にも効くと言う。そのような効能書きのある立札が、神社の厩舎の前にあつたと言うから親切である。

歯ぎしりと神馬を詠んだ句をもう一つ。

歯ぎしりに妙だと話す神馬引

神馬は毎日、豆を食べているので歯ぎしりするはずがない。空耳かもしれないが、神馬引きには馬が歯ぎしりしているように聞こえた。不思議に思うが、歯ぎしりであれば夜するはずだと納得する。

境内の砂利の音が歯ぎしりに似ていたのであろう。

「息子^{むすこ}どのの寝言^{ねごと}と掛合^{かけあ}にギリく歯^{かむ}を咬^かといふもんだから、やかましくて寝^ねつかれねへ」
『滑稽本』浮世風呂―一二。

右の一節は、歯ぎしりが人に迷惑をかける習癖であることを物語っている。

歯ぎしりは睡眠中に起きる無意識な生理現象。他人には迷惑な事態であっても、当の本人は全く罪の意識がない。

歯ぎしりの原因は、咀嚼筋が何らかの理由により異常に緊張するためと考えられている。昔から大豆は米と同じで、呪力のある穀物であると信じられていた。大豆を食べると歯ぎしりが治ると言う根拠は不明である。歯ぎしりの原因が精神の緊張によるものであれば、呪力の宿る神馬の豆は暗示により精神を癒すことが出来るかもしれない。人を悩ます歯ぎしりが治るのであれば、科学的根拠などどうでもよからう。

歯がなけりやほつてもくへぬ孝行さ

『俳風柳多留』四十篇

中国二十四孝の一人とされる孟宗を皮肉っている。

「ほつても」は筍を「掘つても」と「欲しても」を掛けて言った洒落。欲してもは「欲しがる」の意。

先の句は孟宗の故事を下敷きにしたものである。

ある年の冬、孟宗の母が筍を食べたいと言い出した。孟宗は裏の竹林に行き筍を探したが、雪が深くて筍を見つけないことが出来ない。何とかして母親に筍を食べさせてやりたい。天に向かつて乞いながら竹に寄り添っていたところ、突然、大地が裂け、そこから筍が生えてきたと言う。

孟宗の願いはかない、母親に季節はずれの筍を食べさせることが出来た。孟宗竹の名の由

来は孟宗の孝による。

川柳は人の幸福を正面から捉えない。穿ってみるのが常識である。母親が欲しがる筍を掘り当ても素直にほめない。歯がなければ筍は噛めないだろうと親孝行を皮肉る。

「歯も無き口を少し頬咲ほほぐみて云く、『年来としより、此の老法師は、未だいま此く微妙めいたく、被調美ちようびせられたる和太利わたりをこそ、不食候くいはらわすなりぬれ』」（『今昔物語集』―二十八）。

右の一節では歯のない老法師が久しぶりにキノコを食べて喜んでゐる。歯の丈夫な筍好きとは大違い。老法師はキノコの美味をめぐるだけではない。歯がなくて不自由でも、口にすることが出来たことを感謝している。

歯がなければ筍はおろか、キノコのような柔らかい物でも食べるのに躊躇する。非凡な人間は凡人とは違い、歯はなくても動じない。歯が強くて奢ることはないであろう。

物を食べることは一種の征服欲である。歯がなければ食欲は削がれ、食べる楽しみまで失つてしまう。やはり歯は一本たりとも多くあるに越したことはない。筍が食べられるかどうかの問題ではない。歯は力の象徴でもある。

くらへども其あじわひは入齒也

（『誹風柳多留』二十九篇）

入れ歯による食の味気なさを穿っている。悲哀にも似た切実な句である。

味は舌で感じる。歯と味は無縁のように思われるが、実はそうではない。歯は味覚にひと味も、ふた味も違つた味付けをする。

歯に味覚を感じる味蕾はないが、味覚の触媒作用のような働きをすることがある。歯応えと言う立派な味を付けることが出来る。柔らかい物より、固い物を食べた時の方が歯応えがあり、食の達成感が得られる。味わい深いとは、このような感覚を言うのである。歯切れのよい物を食べた時の「シャキシヤキ」感も食に立派な味付けをする。

食の味わいには口の粘膜もかわつてゐる。粘膜が皮膚のように硬くて厚くては、繊細な食の感触を味わうことは出来ない。粘膜の敏感な感覚は食の大事な要素であると言つてよい。

入れ歯では歯触りは元より、粘膜を介しての食の感覚を味わうことが出来ない。特に上顎の入れ歯は最悪である。口蓋部の粘膜は義歯床で被われ、触感を感じ取ることが出来ない。先の句にある江戸時代に入れ歯は木製であり、多くは黄楊つげが使われている。入れ歯がいかに精巧に出来ていても知れている。長く使つてゐるうちに木目が現れ、舌触りが悪くなる。

ひよっとすると、ささくれた入歯で舌が傷つくかもしれない。

入歯師が苦心してこしらえた入歯であっても、入れ心地は決してよくなかったはずである。それでも入れ歯は高価であり、一部の裕福な者しか入れることが出来なかった。

章魚鮑土手を逃げたりむぐつたり

右の句は、蛸と鮑を食べるのに悪戦苦闘している歯のない老人を揶揄している。

「章魚」はタコ。「鮑」はあわび。「土手」は歯のない歯茎。

歯がなければ蛸や鮑は噛み切れず、口の中で踊るのが関の山。踊る獲物を捕らえるには入歯が必要。すわりの悪い入れ歯であっても、ないよりましであろう。

呑こんだ入歯おかはでいせや取り

『俳風柳多留』三十三篇

伊勢商人のケチぶりを嘲笑っている。

「おかは」は「御廁」。持ち運びの出来る便器で、「おまる」とも言う。

「いせや」は「伊勢屋」。

昔、伊勢から江戸に出て来た商人は皆、伊勢屋と言った。伊勢商人は勤儉な人が多いことから、江戸っ子は吝嗇家を「伊勢屋」と呼び、なぶった。吝嗇家と言えば聞こえはいいが、要するにケチなのである。

先の句は、呑みこんだ入れ歯が糞と一緒に出て来るのを待つ、ケチな伊勢商人を笑っている。糞にまみれた入れ歯を見つけて、さぞかし安堵したことであろう。

御廁の蓋は小判型をしている。御廁は貨幣の卑称であり、御廁とケチな人間は何かと縁がありそうだ。

伊勢屋と言う呼称に、「いせる」の語感があるのが面白い。いせるは「じらす」や「からかう」の意があり、伊勢屋が笑い種になっても不思議ではない。

誤飲した入れ歯の結末を知るには排泄物の観察が一番である。それも御廁を使っているのが最善策。味噌も糞も一緒では大事なものは見つかからない。自分の排泄物だけであれば調べる苦労も少なくて済む。時間をかけて丹念に探せば小さな入れ歯であっても必ず見つかるはずだ。古の賢人の知恵と勇氣には脱帽するしかない。ケチなどと侮れない。

江戸時代に入れ歯は高価であった。入れ歯をすることが出来たのは裕福な商人と一部の特権階級のみである。入れ歯を入れることの出来ない庶民は指をくわえて羨望するしかなかった。

入れ歯は滝沢馬琴、杉田玄白、本居宣長などの文化人も入れている。馬琴の入れ歯は上下合わせて三兩したと言う。当時の知識人は知識だけでなく、金銭も多く身に付けていたのであろう。

吝嗇家と言われても動じない伊勢商人のケチぶりを詠んだ句をもう一つ。

発句にもならぬ鯉を伊勢屋買い

初鯉は高いので買わない。旬が過ぎれば安くなる。その時に買う。合理的と言えば合理的であるが、季節を楽しむ遊びどころがない。伊勢屋はあくまでも現実的である。

儉約家には独特な価値観があるらしい。同じ高価なものであっても、役に立ち形に残る入れ歯を入れる。初鯉は食べてしまえば、ただの魚。糞には鯉の跡形もない。

宵越しの銭は持たない江戸っ子には、そのへ理屈にも似た理屈が理解出来なかったのである。

角力好き入歯の工合くひ違ひ

『誹風柳多留』五十一篇

ひいき力士の相撲を観ていて、つい力が入り、入れ歯を強く噛みしめた。

入れ歯の咬み合わせが悪く成るほど応援する相撲好きを揶揄している。

先の句の「くひ違ひ」は「食い違い」であり、上下の義歯が咬み合わなくなることを言う。

「くひ」は「食う」に通じる。ひいきする平幕力士が役力士を食った。興奮して歯を強く食いしぱり、入れ歯の具合が悪くなったと解釈すると、さらに面白くなる。

江戸時代、相撲は歌舞伎や吉原通いとならび、大人の三大娯楽の一つであった。

寛政三年（一七九二）四月から、えこういん回向院と言う浄土真宗の寺で本場所が年二回、一場所十日の日程で開催されるようになった。これが江戸相撲の本格的な始まりと言われている。

江戸後期の人気力士は雷電らいでんためえもん為右衛門、谷風たにかぜ梶之助、小野川喜三郎などである。特に雷電為右衛門は巨漢で、人気、実力ともに抜群であった。

江戸時代の「入れ歯」と言えば、総義歯を意味する。義歯の土台は木で出来ており、「木床上下顎総入れ歯」と言うのが正しい呼び方である。簡単に「木床堤もくしょうてい」とも言った。

木床の素材の多くは黄楊つげである。木製の義歯は軽くて、しかも粘膜によく吸着するので装着時の安定がよかった。木床の堤の部分には人工歯が嵌め込まれている。

人工歯は蠟石、象牙、鹿の角、シャコ貝などの固い材料を削ってこしらえた。上等な入れ歯になると、さらに歯と床の結合をよくするため、三味線の糸で歯を床にしっかり結わえ付

ける。

いくら丈夫に出来た入れ歯であっても、強い咬合力が加わると悲鳴を上げる。自分の歯はなくても、総入れ歯には十五キログラム以上の力がのしかかる。

ひいき力士の戦いぶりを観ていてつい興奮して体に力が入る。入れ歯も強く噛みしめてしまう。歯と床を結んだ糸がゆるむ。入れ歯の咬み合わせが悪くなるのは道理である。

昔はひいき力士が勝つと祝儀の代わりに羽織を土俵に向けて投げたと言う。羽織はあとで現金に引き換える。相撲見物は入れ歯も壊れ、思わぬ出費を覚悟しなければならない。

目にはめがねは入ばにて間にあへど

『俳風柳多留』三十八篇

男の嘆きを吐いている。

歯は入れ歯目はめがねにて事たれど

三つのうち目も歯もよくて哀れなり

右の二つも冒頭の句と同じ男の嘆き。

人間は歳を取ると、歯、目、性の順に弱くなると言う。特に男の性の衰えは自尊心の喪失にもつながる。

先の三つの句は、歯と目の衰弱はそれぞれ手立てがあるから不自由ではない、性の衰えだけはどうすることも出来ないと吐露している。

世の中にはその不自由を自由にしようとするつわものがあるから、常識だけでは計れない。

自力では解決することの出来ない性の力の低下を、地黄丸や長命丸などの閨薬の力を借りて男を蘇らす努力をする。時には閨具の助けに支えられて男の威信を保つ。

地黄丸は地黄を主成分とする漢方薬で、補血や強精剤として用いられた。

地黄はゴマノハグサ科の多年草で中国が原産。その他、クジラやウシの陰茎も「猛り」と称され、強壯剤として愛用されている。

長命丸は局所の外用薬。名前が示すように、男の猛りを持続させる効果があったようだ。

長命丸は閨薬や閨具の専門店で有名な江戸両国の四ツ目屋本舗で売られていた。閨薬は地黄丸や長命丸などを言い、閨具は性の用具。肥後芋茎や、りん玉などが閨具。

「世の人の心まどはすこと、色欲にはしかず」『徒然草』一八とあるように、色欲は何

よりも人のこころを混乱させると言う。凡人には馬に念仏、犬に論語であろう。

性の欲望は時代や老若男女を問わず、人間の暗黙の関心事と言ってよい。そう簡単に自制出来るものではない。

医者殿は女房が立つと意見をし

「あまり奥方を可愛がり過ぎると『腎虚』になりますぞ」と医者が言っている。

腎虚は漢方の病名で、腎水（精液）の涸渇が原因で起こる身体の衰弱を言う。誰に憚ることのない夫婦の交わりであっても、度が過ぎると体を損なうと言うのである。

色欲と言う怪物は何歳になっても衰え知らずの厄介者である。

路次口の笑ひ齒入が出して居る

『誹風柳多留』二十八篇

入齒師が路次口で遊女相手に言葉巧みに何かを売っている。口上が笑いを誘ったようだ。遊女は入れ歯をする年頃ではない。歯磨き粉か歯の薬を買っているのである。

「齒入」が「出して居る」と言った表現に言葉遊びの妙がある。路次口の「口」と齒入の「齒」が縁語であるのも利いている。

「路次口」は切見世に通じる細い道の入り口。路次口には「路次番」と言う切見世の番人があり、不法者の侵入を見張った。遊女たちは路次番のおかげで何の心配もなく路次を行き来できた。

〈錢びらで路次番までが顔を知り〉と言う句があるように、路次番は気前のいい遊客とも顔なじみであった。

「切見世」は江戸時代にあつた下級の女郎屋。「鉄砲見世」や「局見世」などとも言った。短い時間を一区切りにして売春したのでこの称がある。

「齒入」は入齒師。入れ歯が専門だが、歯磨き粉も売る。

江戸時代には入齒師の他に歯医師もあつた。歯医師は入れ歯をこしらえるだけでなく、歯の治療もした。歯医師は両替屋や薬屋と同じく江戸時代に出来た職業である。

源水は歯抜き目抜きは芥子之助

独楽回しの名人、松井源水と、手品師の東芥子之介あずまけしのすけの人氣ぶりを揶揄している。「歯抜き」と「目抜き」が韻を踏んでいるので調子がよい。

源水は独楽を回して客を集め、歯磨き粉や歯の薬を売った。時には歯を抜いて入れ歯も入れたと言う。

源水は安永の頃、浅草で活躍し、浅草田原町三丁目に住んでいたことから、その横丁を「源水横丁」と呼んでいる。

芥子之介は宝暦頃の名高い手品使いであるから、源水より前の芸人である。浅草奥山千本桜の辺りに陣取り、得意な豆と徳利を使って見物客を楽しませたようだ。

新造の口へ入歯を置きわすれ

路次口の入歯師を揶揄しているのではない。若い遊女と老いた遊客の戯れごとを笑っている。歯の揃ったうら若い女の口に入れ歯を落とすとは何とも滑稽な話である。昔の入れ歯は外れやすかったのであるう。

喰つぶすやつに限って歯をみがき

『誹風柳多留』初篇

「喰つぶすやつ」は働かずに無駄飯を食い、身代を喰い潰す者を言う。いわゆる道楽者である。

その道楽者が食べるのに事欠くのに、贅沢にも歯を磨いていると皮肉っている。

歯磨きが庶民の間で身近な習慣になったのは江戸時代。江戸っ子は白い歯と口臭に敏感だった。楊枝を使い歯をきれいにするのはお洒落であり、粋な身だしなみであると考えた。

粋な江戸っ子は歯磨きを常識と思い、とにかく一生懸命に歯を磨いたのである。

昔、歯磨きには房楊枝ふさようじを使った。房楊枝は楊枝の片方が平らな刷毛状になっており、それで歯を扱く。舌の表面のざらつきは楊枝の柄の部分を横にして擦って取る。

房楊枝を使うようになったのは江戸時代であり、房楊枝の起源は平安時代にさかのぼる。平安時代は楊枝を「歯木しぼく」と言い、それを噛んで歯垢を落とした。歯木は噛んでいるうちに先端がささくれて房状になり、歯を磨くのに都合のよい形になる。房楊枝の始まりと言ってもよいかもしれない。

歯木と呼んだ楊枝は「柳の枝」の意である。柳は薬効があり、楊枝の材料として最適だった。

歯を磨くには楊枝のほかには歯磨粉がなくてはならない。歯磨粉は寛永二十年（一六四三）に、丁字屋喜左衛門が朝鮮人の伝を受けて、「大明香薬砂」を製造・販売したのが始まりとされている。その後、歯磨粉は「梅見散ばいけんさん」や「兼康かねやす」などの銘柄でつぎつぎと売り出された。

「皮付の大楊枝かわつきやうじ、喜三郎が琢き砂みがすなを、たしなみ宿やどを出て、壺丁計りばかは、足元もさだめ」『好色二代男』諸艶大鑑）。

右の一節にあるように、粋な江戸っ子は旅に出る時も楊枝と歯磨粉を携帯した。楊枝は「皮付の大楊枝」とあるから、楊柳の枝の部分でこしらえた男性用の楊枝であろう。女性用は枝の先を使っているので細い。

「喜三郎が琢き砂」は喜三郎と言う銘の歯磨粉。粋人は楊枝の材質や歯磨粉の銘柄にまでこだわった。

歯は白く輝いているに越したことはない。しかし、贅沢が過ぎて身代を潰したのでは歯の白さなど洒落にもならない。

雪隠で歯をみがいてる居候

『誹風柳多留』三十七篇

居候のくせに贅沢にも便所に隠れて歯を磨いていると皮肉った。普通、長屋では、歯磨きは共同井戸で行う。

「雪隠」は禅宗寺院での用語であり、「廁」の意。廁は便所。

雪隠と言う語は主に関西で使われていた。関東では廁を「後架」と言った。

「居候」は、親から勘当を受けた者が他人の家においてもらうことを言う。

〈居候三杯目にはそつと出し〉と言うように、居候は食はもとより、何かにつけて遠慮しなければならぬ立場にある。それにもかかわらず、〈口軽く尻の重いは居候〉とあるように、居候は口は達者だが、体は動かそうとしない。根っからの浮世離れた人間である。

昔、町人のほとんどは長屋住まいであった。長屋では便所・井戸・ゴミ捨て場などはどれも共同使用する。居候はお世話になっている家はもとより、長屋の住民にも遠慮しなければならない。それを自分の歯磨粉とは言え、高価なものを使って歯を磨くとは不届き者である。長屋の住民は塩を用いて歯を磨いていたのである。

「歯磨を午睡のお目覚めにもつかひ、額際から小鼻の脇を二本指で撫るが手癖さ」『滑稽本』浮世床とあるように、江戸時代、歯磨きは粋で贅沢が出来る者の習慣の一つだった。

冒頭の句は世情に疎い人間を皮肉っていることに違いはないが、少し穿って、「歯をみがいてる」を「歯を研いでいる」と読み替えると、居候は少し救われるかもしれない。

「歯を研ぐ」は、戦に備えて虎視眈々と準備することの譬え。日頃は昼行燈のような生活しかしていない居候であっても、時には厠で歯を磨きながら、将来に向けての作戦を練っているのであればあつぱれと言つてよいであろう。

居候は静かに厠に身を沈め、誰に憚ることなく戦略的な思索にふければよい。廁は歯を磨

くだけではもったいない自由な空間である。

九重は齒みがきよりもふしがうれ

〔誹風柳多留』六篇〕

御所では齒磨粉よりも五倍子のほうがよく売れると皮肉った。

「九重」は内裏。御所を中心にした周辺の建物を言う。

昔、中国の王城は門を幾重にも重ねて造ったので、物がいくつも重なっていることを九重と言った。七重、八重より一つ、二つ多いのがミソである。

「五倍子」はお齒黒染に用いる材料。タンニン酸を多く含む瘤状の虫癭を言う。

お齒黒は平安末期に朝廷に仕える公家が付けていたが、江戸時代になり、庶民の婦人たちの間に広まった。

お齒黒にしると景清舟へ投げ

平家の忠臣、悪七兵衛景清こと、平景清の武勇を詠んでいる。

景清が源平屋島の合戦で、源氏方の三保屋四郎国俊の兜の鑢を引きちぎったと言う伝説が下敷にある。

お齒黒にしると鑢を投げたが、誰に投げたかが謎である。男か女か。平家の船には女性が多く乗っていたので女に投げたとするのがよいが、それでは穿ちに乏しい。

景清は国俊からもぎ取った鑢を鉄漿液に使えと源氏方に向けて投げたとするのがよからう。上級武士は公家と同じようにお齒黒を付けていた。

既婚婦人がお齒黒を付けるのは生涯夫に従うことを誓ったしるしである。武士のお齒黒は忠臣二君に仕えずの精神を示した証。お齒黒の「黒」は永久に変色せず不変であることから、公私にわたり契りの象徴になった。

江戸時代にはすでに庶民の間でも齒磨きの習慣があった。それでも多くの者はむし齒に悩まされている。生活水準の高い貴族でも、むし齒の罹患率は庶民より高かった。貴族の食事は軟食であるため、齒の咬耗が少なく、むし齒の出来る環境に適していたのである。

貴族の砂糖摂取量が庶民より多かったことも、むし齒の発生を助長している。

冒頭の句では、貴族は庶民よりむし齒になりやすいのに、齒磨粉は買わずに五倍子を買っているという皮肉った。

「梅紅散くすり齒磨口中一切、ばいこさん」〔滑稽本』浮世風呂―前〕は齒磨粉売りの口上。「梅紅散」は江戸日本橋の伊勢吉で売られていた齒磨粉の銘柄である。

江戸っ子が声を張り上げて梅紅散を売り歩いたとしても、遠い古の九重には届かなかったであろう。

楊枝見せ人の口はにかゝる也

『俳風柳多留』三十六篇

「楊枝見せ」は楊枝や五倍子ふじしを売る店。多くは浅草観音堂の左右と前通りの参道に沿ってあった。どの店も看板娘を置いていた。

「口はにかゝる」は噂にのぼるの意。「口は」は「口齒」くちはあるいは「口端」くちはと書く。「楊枝」と「口」が縁語であるのも利いている。

先の句は、楊枝店には美人の看板娘を出しておけば噂にのぼり繁盛すると皮肉った。寛永の頃の楊枝店は店を構えず、長櫃のような台の上に楊枝を置き茶筌と一緒に並べて売っていた。床店と言う飯店舗で楊枝を売るようになるのは明和になってからのことである。

当時、本柳屋もとやなぎやと言う楊枝見世が浅草観音堂境内にあった。そこにはお藤と言う美しい娘がいた。お藤は上野谷中にある笠森稲荷の茶酌女、お仙とともに人気があり、江戸若衆の血を騒がせたと言う。二人は美人の看板娘だったのである。

中でもお仙は浮世絵に描かれるほどの美人であり、のちに「笠森のお仙」とまで呼ばれるようになったと伝えられている。

楊枝見世の商売上手を揶揄した句をもう一つ。

白い歯を見せれば賣れる楊枝見世

お藤のような美人が店頭に立ち、客に愛嬌を振りまけば、客は欲しくもない楊枝の一つや二つ買ったかもしれない。白い歯と楊枝が縁語であるのも利いている。

楊枝見世のしたたかな商いぶりを皮肉った句を一つ。

楊枝屋は残米も賣りさしも賣り

楊枝と五倍子ふじしだけ売っていればいいのに、欲深く歯とは関係のない物まで売っていると憎まれ口をたたいている。

「残米」は境内に奉納してある鶏にやる餌。

「さし」は「緡」。銭の穴に通す細い縄。お百度参りの時に使う「百度緡」を言う。残米と緡は浅草境内ではお参りの必需品。

浅草観音堂境内は、いろいろな人の織りなす場所である。粋な江戸っ子は競って美人の看

板娘の居る楊枝見世に通った。楊枝を買うのは伊達や体裁だけではなかった。下心もあったのである。

浅草で高い楊枝を武士つかひ

『俳風柳多留』四十四篇

浅草観音堂の境内で、貧しいはずの武士が高級な楊枝を買っていると皮肉った。

江戸初期の武士は威厳があり、経済的にも豊かだった。その様子が『仮名草子』の「都風俗鑑」にある挿絵から読み取れる。

編笠をかぶった武士が右手に房楊枝を持ち、腰には大小の刀とともに巾着と印籠を下げている。脇に草履取りと太鼓持ちを従えた姿は大臣の象徴と言ってよからう。草履取りは竹杖と大臣羽織を持ち、太鼓持ちは脇差を身に付けている。場所は京都祇園の八坂神社前。

「大臣」は遊里の上客の称。江戸後期の武士には、よき時代の栄耀栄華は羨ましい夢のような話に思われたかもしれない。

江戸時代、武士は農民を搾取して生き、町人は武士を御して肥ったと言っても過言ではなからう。

江戸中期を過ぎると武士を取り巻く環境は一変する。武士と町人の距離は接近し、武士の町人化や、町人の武士化などの異常現象が起きる。武士は経済的にも困窮を極め、食に事欠く下級武士も現れた。旗本のような上級武士でさえ、儉約しなければ日常生活はままならなかった。

先の句は、武士の権威と実生活の落差を目の当たりにした庶民の穿ちの目と言ってよからう。食えることさえ苦しいはずの武士が見栄を張り、高い楊枝を買っていると皮肉った。

武士を題材にした江戸川柳の多くは軽蔑を主眼に置いている。そのような句を一つ。

人は武士なぜ傾城にいやがられ

「花は桜木人は武士」と謳歌した武士であっても、遊里の世界では権威など何の役にも立たない。遊女に軽くあしらわれるのが関の山。遊里で最も羽振りがよかったのは商人である。

幕末の武士にはかつて見られた威厳など微塵もない。皮肉にも〈武士は食はねど高楊枝〉^{ぶしはくはたかようじ}と言うことわざを残したのは称賛に値する。誇り高き清廉な武士の譬えであるが、人は貧しくとも清貧に堪えなければならぬことを教えている。

柳と娘こきまぜる楊枝見せ

『誹風柳多留二十三篇』

美しい看板娘を置いて客寄せする楊枝見世を皮肉っている。

「柳」は楊枝の意。楊枝の材料は楊柳。ようりゅう。「楊柳」はヤナギの漢語的表現である。「楊」はカワヤナギ。「柳」はシダレヤナギを意味する。

「楊枝見せ」は楊枝店に同じ。

「楊枝を取りに上る時、錫杖を錫杖に立つ」(『日本靈異記』―上)とあるように、柳の枝を取るには錫杖しやくじょうを継ぎ足して高い柳の木に登らなければならない。

昔、楊柳で加持すると病気が治ると信じていた。祈禱者が楊柳を大切にする訳はそこにあったのであろう。

「錫杖」は僧侶が持つ杖。杖の頭部に金属の輪が付いているのが特徴。

柳は昔から口臭や歯茎の痛みを取る効果があると伝えられていた。江戸っ子が好んで柳の枝でこしらえた楊枝を愛用したのは当然のことと言ってよい。柳にはご利益があり、歯の病氣まで治す力があるのであれば、これほど有り難いものはない。

楊枝店では柳の細い枝をたたいて房状にしたものを房楊枝として売った。房楊枝は歯垢を掻き落とすのに便利な道具である。柄の部分を使えば舌の表面の苔も掻き落とすことが出来る。房楊枝は万能の楊枝と言ってよからう。

先の句の「柳と娘こきまぜる」は乱暴な言葉に聞こえるが、これは『古今和歌集』にある次の一首を下敷きにしており、優雅で、しかも格調高い。

見渡せば柳桜みわたせばやなぎはなをこきまぜて

みやこはるにしき
都ぞ春の錦なりける

先の句では「柳桜やなぎはなをこきまぜて」を、「柳と娘こきまぜる」ともじって洒落ている。楊枝の材料である「柳」と、美人の譬えである「柳腰」の娘を、楊枝店に混ぜ合わせて並べているとも皮肉った。

柳腰は細くてしなやかな腰。その柳腰を揶揄した句を一つ。

楊枝より娘柳で賣れるなり

浅草寺境内にあった柳屋のお藤は明和(一七六四―一七七二)の三美人の一人。

楊枝は売れなくても、美人の看板娘はすぐに売れるだろうと皮肉る。

楊枝やは戸板に豆を出して置き

商い上手な楊枝屋を擲擧している。

「戸板に豆」の文句取りが利いている。

江戸では明暦三年（一六五七）の大火のあと、浅草寺の境内に休憩所として水茶屋が出来た。そのほかにも楊枝店^{ようじだな}、団子店、張子店などもある。これらの店は浅草寺に地代を納めれば営業が許可された。

楊枝店は朝、母親が出て来て開店準備をする。昼頃までは母親一人で接客するが、そのあとは夕方まで娘に店を任せる。

暮れ六つ、今の午後六時頃になると店をたたんで帰宅するのが楊枝店の日課であった。

先の句の「戸板に豆」はことわざを利かせている。

戸板の上に置いた豆は転がって扱いにくいことから、自分の思い通りにならないことの譬え。ここでは「戸板」は店頭の比喩。「豆」は女陰の異称であり、看板娘の意。

楊枝を買いに来た男客が美人の売り子にちよつかいを掛けても、軽くあしらわれるものだと言っているであろう。

男ごころを惑わす看板娘の句をもう一つ。

楊枝で一度かみそりではずかしき

美人の娘に会いたくて楊枝を買いに行く。それでも胸のときめきは収まらない。また会いたい。今度は必要のないカミソリを買いに行った。

さすがに二度の看板娘との対面は恥ずかしかったのであろう。顔もろくに見られなかったかもしれない。昔から勝気な女があれば、気の弱い男もあつたものだ。

楊枝店には若い娘がいるから繁盛する。年寄が楊枝を売るとどうなるか。

婆々あ出て女にばかり楊枝賣る

母親と娘が楊枝を売っていると、若い男は娘から買いたい。長い男の列が出来ても娘の前に並びたい。母親には見向きもしない。母親は専ら女性客の対応にまわる。

「楊枝屋の娘の美^{うつくしき}に氣をとられ、傘^{からかさ}の澤山なるに」(『洒落本』辰巳之園)とあるよう

に、どの楊枝店も看板に美しい娘を据えていた。看板娘は男客が傘を置き忘れるほど客のころを奪ったのであろう。

婆では戸板の豆にならないのである。

はやり醫者やうじをもつてかごにのり

『誹風柳多留』十七篇

繁盛している町医者の贅沢ぶりを皮肉っている。

江戸時代は今のような医師免許制度はなく、誰でも医者になることが出来た。医者を志す者は開業医に弟子入りして、日常の臨床を通して技術を中心にした医術を身に付けた。

江戸の医者は奥医師と町医者に大別される。奥医師は江戸城本丸の中奥に勤務する医者であり、町医者は町中で開業している者をいう。奥医師は今で言う専門医。本道医（内科医）、奥外科医（外科医）、奥口中医（歯科医）などの専門分野に分かれていた。

町医者には漢学の素養のある武家の二、三男、地方の藩医の子弟、あるいは香具師（やし）の経験のある者などがなっている。

香具師は居合抜きや独楽回しをして客を集め、歯を抜き、薬などを売る者をいう。

町医者は素養や経歴に差があり、技量にも大差があるため、俗に言う藪医者もあつた。先の句にある医者は藪医者ではない。人気があり、繁盛した医者である。

「やうじ」は「楊枝」。「かご」は「籠」。

楊枝に「用事」を掛けて洒落ているのかもしれない。何が用事であるかが問題である。

江戸時代、医者は籠に乗って往診に出かけた。一本差に長羽織と云ういでたちは、庶民の目には羨ましく映ったことであろう。坊主が医者に扮して遊里に通うくらいだから、医者は往診帰りに廓遊びをしていたに違いない。楊枝が贅沢な遊びを象徴している。

医者は社会的にも地位が高く、世間から信用されていたのである。

医者の繁盛ぶりを皮肉った句をもう一つ。

中条はむごたらしい蔵をたて

ちゅうじょう

「中条」は中条流産婦人科医の総称。墮胎を専門にする医者である。

「蔵」は残酷なことをして得た富の象徴。中条は墮胎により大金を得たのである。

少々品位を欠くが、多忙な町医者を揶揄した句を一つ。

はやりいしやしている所をおこされる

『誹風末摘花』に見られる句。何をしていたかの説明は無粋であろう。

流行り医者は寝る暇もなく忙しかった。

ぎんなんが落ちると楊枝置いて立ち

『誹風柳多留』十一篇

川柳には理屈の句がある。この句も理詰めでいかなければ解釈が難しい。

「ぎんなん」は「銀杏」。イチヨウの実と解してよかるう。〈ぎんなんがさぞなるうのと浅黄うら〉と言う句があることから、銀杏はイチヨウの実であることが明らかである。

「浅黄うら」は田舎侍の蔑称。田舎侍は浅黄裏の粗末な着物を身に着けていたことからこの称がある。江戸っ子は浅黄裏を嫌い軽蔑した。

冒頭の句も先の句と同じように、楊枝店ようじだなでの武士の仕草を詠んでいることに違いはない。冒頭の句ではイチヨウの実が落ちると武家風の男は楊枝を置いて立ち去った。武士たる者がイチヨウの実の落ちるのを待っていたのでは武士としての面目がない。楊枝店の陳列棚の上に落ちたイチヨウの葉の横に楊枝を一本添えて自分の素性を訴えた。浅黄裏とはこの仕草が違う。

イチヨウの葉は「大銀杏」おおいちろうを意味する。大銀杏は男の髪型で、鬚まげの先をイチヨウの葉のように大きく広げて結ったものを言う。イチヨウの葉の横に楊枝を一本置けば、脇差とともに二本差しにもなる。「二本差し」は武士の称。

武士は腰に刀と脇差の二本を差すが、楊枝店の男は脇差しか身に付けていなかった。江戸時代は武士以外の者でも脇差を持っていた。イチヨウの葉の横に楊枝を添えて、自分は二本差しの武士であることを暗に示したのである。

江戸には楊枝店が各所にあつた。中でも浅草観音堂の奥にある「柳屋」と言う店が繁盛した。柳屋には明和の三美人の一人と言われた、お藤と言う看板娘がいる。柳屋は大きなイチヨウの木の下にあつたことから、お藤は「銀杏娘」いちろうむすめとも呼ばれている。

先の二つの句にある楊枝店はイチヨウの木のある柳屋であろう。冒頭の句では、武家風の男がお藤を目当てに楊枝を買いに来たが特別扱いされない。自分の身分を明かしたくてイチヨウの葉の横に楊枝を一本置く。イチヨウの葉と楊枝を使い、大銀杏と二本差しを演出したのである。

齢ほど枝をついてる一松

『誹風柳多留』三十三篇

江州唐崎かうしかざきにある一本松の長寿を詠んでいる。

江州は近江国の別称。唐崎は現在の滋賀県大津市北部にある琵琶湖畔の景勝地。

古人は「一松」ひとまつを「唐崎の一ツ松」あるいは「唐崎の弧松」と呼んだ。唐崎の松を主役にした唐崎の夜雨は近江八景の一つに数えられている。その美しさは名高い。

松は姿が美しいだけではない。古来、わが国では、松は長寿を象徴する木として尊ばれて来た。

「よはひ齡のつもりには、げにおのづからうちゆるぶことのみなむ、多くはべりける」は『源氏物語』の「行幸」にあるくたり。

歳を取ると気が緩んで、失礼ばかりしてしまうと述べている。

『源氏物語』には「よはひ齡」についての記述が各所にあるのが興味深い。

「かかるよはひ齡の末に、若く盛りの子におく後れたてまつりてもよふこと」（「葵」）や、「静かにこも籠りゐて、後の世のことをつとめ、かつはよわひ齡をも延べん」（「絵合」）などはその例。

老齡に及んでの若くて元気な子との死別の悲しみや、後世のために勤行をし、一方では自分の命をも延ばそうとする気概は、時世とは関係なく誰でも持っている。

「命長ければ辱多し。長くとも、四十に足らぬ程にて死なむこそめやすかるべけれ」は『徒然草』の「第七段」にある一節。

人間の加齡を忌まわしく思っているが、四十歳を待たずに死ぬのがよいとは、古の人は太く短く生きることには価値を求めたのであろうか。

兼好法師自身は六十七歳まで生きているから滑稽である。当時とすれば長寿であつたに違いない。齡にこだわつた紫式部は四十歳くらいで没しているから皮肉である。

齡はどの文芸でも話題になりやすい。和歌に詠まれた齡の歌を一首。

わがよはひ齡衰へゆけばしらたへ白妙の

そで袖のなれにし君をしぞ思ふ

『新古今和歌集』―十五

肉体は衰えても愛する人と思うところはいつまでも若くて変わることはないと言う。

「松は千年竹は万年」は長寿を保つことの譬え。人が松や竹の齡にあやかっても知れている。千年も万年も生きられない。せめてここだけはいつ迄も若くありたいと願うのが普通であらう。

おわりに

齒は白くて小さな器官。江戸川柳に見られる齒は小さくても堂々と光り輝いている。齒は言葉を発する訳ではないが、身体言語としての齒は言葉以上の力を発揮する。

齒は言葉の知恵とも言うべきことわざでも重宝にされている。齒は身近な体の一部であり、力強い器官として日頃から慣れ親しまれているからであらう。

江戸川柳に見られる歯もことわざに負けてはいない。歯の持つ底力を精一杯表現している。ことわざも江戸川柳も平凡な日常生活の中で編み出された言葉の文化と言ってよからう。江戸川柳にことわざが見え隠れするのは、江戸川柳が素朴な人間の暮らしとところを大切に出来たことにほかならない。

俳句は自然を対象にして詠むが、川柳は人のこころを吐露するのが得意である。俳句を作るには少々うるさい約束事があるが、川柳は自由である。何の束縛もない。文語体にこだわらなくても、口語体でも格調高く胸の内をさらけ出すことが出来る。

江戸川柳は形式だけでなく、詠まれる中身も自由闊達。江戸川柳は庶民の目が主眼にあるためか、武士はおろか、殿上人でさえ達者な言葉で切り捨てる。天下国家など怖くない。天に向かって臆することなく自由に異を唱えることが出来たのは、庶民と言う万人の力強い味方が後ろ盾になっていたからであろう。

川柳の命は「洒落」「穿ち」「含み」にある。江戸川柳においてもそれらの三つの要素がいかになく発揮されている。歯と言う小さな対象物であっても江戸川柳では切り捨てることなく大切に扱う。江戸庶民の日々の生活の中で歯がいかに大切な器官であったかを、江戸川柳は物語っていると云ってよからう。

「歯は葉なり、歯牙の脱落葉の如し」は曲亭馬琴の残した嘆きのことば。馬琴を初め、江戸に生きた人々の歯の持つ意義の洞察力には脱帽するしかない。

稿を終えるにあたり、本拙稿を全篇にわたりお目通し頂いた、今は亡き外山滋比古先生に深い敬意を表します。